

ユネスコ世界遺産大会2013 ESD in MIE 2014

平成25年度 日本／ユネスコパートナーシップ事業

 三重大学

【日時】

平成26年2月15日(土)

13:00～16:00 一般公開

【会場】

三重大学

環境・情報科学館 1階

参加費無料

【対象】

一般小中高校教員
教育行政関係者
教育研究等関係者(大学・研究所等)
保護者、ユネスコ関係者
企業関係者、学生
その他ユネスコ活動に関心のある方

三重大学

三重大学は平成21年8月21日にユネスコ
スクールとして認定され、大学全体でユネス
コ活動を推進しています。





目 次

1. 研修会/シンポジウムの日程・・・・・・・・・・	01
2. 研修会/シンポジウムの発表者・・・・・・・・・・	02
3. 持続発展教育(ESD) in 三重 2014 について・・・・・・	03
4. 日本における ESD の推進について・・・・・・・・・・	13
～あなたの毎日が未来になる～	
5. 三重が誇る海女文化・・・・・・・・・・	23
6. ユネスコスクール活動事例報告・・・・・・・・・・	29
7. 海の博物館と海女小屋見学会・・・・・・・・・・	69
参加レポート	

【 認 定 証 】



国立大学法人三重大学は、2009 年 8 月 21 日
ユネスコスクールとして認定され、
大学全体でユネスコ活動を推進しています。

三重大学ユネスコスクール 研修会/シンポジウム2013

ユネスコスクールとは

ユネスコスクールは、1953年、ASPnet (Associated Schools Project Network) として、ユネスコ憲章に示された理念を学校現場で実践するため、国際理解教育の実験的な試みを比較研究し、その調整をはかる共同体として発足しました。設立された当時15加盟国33機関であった加盟校は、現在180か国以上の国・地域で約9,000校に増加しています。日本からは2013年12月現在647校の幼稚園、小・中・高等学校及び大学が加盟しています。三重大では三重大の他に鈴鹿市内小中学校5校と津市内中学校1校、名張市内小中学校8校と熊野市内高等学校1校が加盟しており、今後も加盟校の拡大や活動の充実に積極的に支援をしていきます。

プログラム

入場無料

平成26年2月15日(土)

13:00~16:00 (一般公開)

会場：国立大学法人三重大学
環境・情報科学館1階ホール
三重県津市栗真町屋町1577
<http://www.mie-u.ac.jp>

対象：一般小中高校教員、
教育行政関係者、
教育研究関係者(大学、研究所等)
保護者、ユネスコ関係者、
企業関係者、学生、
ユネスコ活動に関心のある方

主催：文部科学省/日本ユネスコ国内
委員会/国立大学法人三重大学

後援：公益財団法人ユネスコ・アジア
文化センター/公益社団法人日
本ユネスコ協会連盟/三重県ユ
ネスコ連絡協議会/三重県教育
委員会/鈴鹿市教育委員会/名張
市教育委員会/熊野市教育委員
会

【問合せ先】国立大学法人 三重大学
環境管理推進センター支援室
担当者：堀・池村
電話：059-231-9823・9223
E:メール
jimukyoku@ceme.mie-u.ac.jp

時 間	内 容
13:00~13:10 13:10~13:45	挨拶 三重大学活動報告 三重大学長 内田 淳正 三重大学理事・副学長 朴 恵淑 「ESD in 三重 2014について」 海の博物館長 三重大学客員教授 石原義剛氏 「三重が誇る海女文化」 三重大学客員教授 川口祐二氏 「海女、このすばらしき人たち」
13:45~14:20	記念講演
14:20~14:30	講 演
14:30~14:40	《休憩》
14:40~16:00	ユネスコスクール 活動事例報告 ①名張市教育委員会学校教育室 指導主事 布本肇氏 「アジア・太平洋青少年 環境フォーラム2013」 ②三重大学教育学部附属中学校 副校長 前田豊美氏 「年間を通した 取り組みと意識の定着 つながり合う個を目指して」 ③三重県立木本高等学校 教諭 川上真由子氏 「平成25年度ユネスコスクール としての取り組み」 ④名張市立薦原小学校 校長 谷戸実氏 「ギフトチョウから考える 薦原の自然と未来」 ⑤三重大学ユネスコスクール 学生委員会 委員長 丹羽麻友 「三重大学環境 ISO 学生委員会 の活動」 ⑥三重大学国際交流センター 譚穎、謝倩氷 ケドカル・アルチャナ 「海との出会い」

前日からの大雪のため参加できない講演者・報告者があり、**プログラム**を変更しました。

三重大学ユネスコスクール研修会/シンポジウム2013

日時：平成26年2月15日(土) 13:00～16:00 (一般公開)

会場：国立大学法人三重大学 環境・情報科学館1階ホール

挨拶(13:00～13:10)

- 三重大学長 内田 淳正

三重大学活動報告(13:10～13:45)

- 「持続発展教育(ESD) in 三重 2014 について」
三重大学理事・副学長 朴 恵淑

記念講演(13:45～14:20)

- 「三重が誇る海女文化」
海の博物館長・三重大学客員教授 石原 義剛氏

講演(14:20～14:30)

- 「海女、このすばらしき人たち」
三重大学客員教授 川口 祐二氏

ユネスコスクール活動事例報告(14:40～16:00)

- 「アジア・太平洋青少年環境フォーラム2013」
名張市教育委員会学校教育室 指導主事 布本 肇氏
- 「年間を通した取り組みと意識の定着 つながり合う個を目指して」
三重大学教育学部附属中学校 副校長 前田 豊美氏
- 「平成25年度 ユネスコスクールとしての取り組み」
三重県立木本高等学校 教諭 川上 真由子氏
- 「ギフチョウから考える薦原の自然と未来」
名張市立薦原小学校 校長 谷戸 実氏
- 「三重大学環境 ISO 学生委員会の活動」～世界一の環境先進大学を目指して～
三重大学ユネスコスクール学生委員会 委員長 丹羽 麻友
- 「海との出会い」
三重大学国際交流センター(松岡研究室) 留学生
譚穎、謝倩氷 ケドカル・アルチャナ

「持続発展教育(ESD) in 三重 2014」 について

大学エネスクール研修会/シンポジウム2013

MIE UNIVERSITY ESD

1. 世界・地域の環境問題と持続発展教育(ESD)
2. 「世界一環境先進三重大学」と持続発展教育(ESD)
3. 持続発展教育(ESD)に関するユネスコ世界会議「ESD in 三重 2014」

朴 恵淑(三重大学理事・副学長)



(1) 環境と開発に関する国連会議(地球サミット)
(リオ・デ・ジャネイロ;1992.6.)

- * 国連気候変動枠組条約(UNFCCC)
- * 国連生物多様性条約(UNCBD)
- * 国連砂漠化防止条約(UNCCD)

(2) 持続可能な開発に関する世界首脳会議
(ヨハネスブルグ;2002.8.)

- * 持続発展教育(ESD)に関するユネスコ世界会議
(愛知・名古屋;2014.11.10-12)

(3) UNFCCC COP3(京都議定書;1997.12)

(4) UNCBD COP10(名古屋議定書;2010.10)

* 4大公害
水俣病、イタイイタイ病、新潟水俣病、四日市喘息

気候変動枠組条約と京都議定書

気候変動枠組条約(UNFCCC、182か国・地域) 1992年採択

究極目的: 温室効果ガス濃度を、気候システムに対して危険な人為的干渉を及ぼすことにならない水準に安定化させる

原則: 共通だが差異のある責任、及び各国の能力に従い、気候系を保護

全締約国の義務: 排出目録の作成、削減計画の立案等

先進国等の義務: 排出量を1990年の水準に戻すことを目的に削減活動を報告

先進国の途上国支援義務: 資金供与、技術移転、キャパシティ・ビルディング等

京都議定書(Kyoto Protocol、181か国・地域) 1997年採択

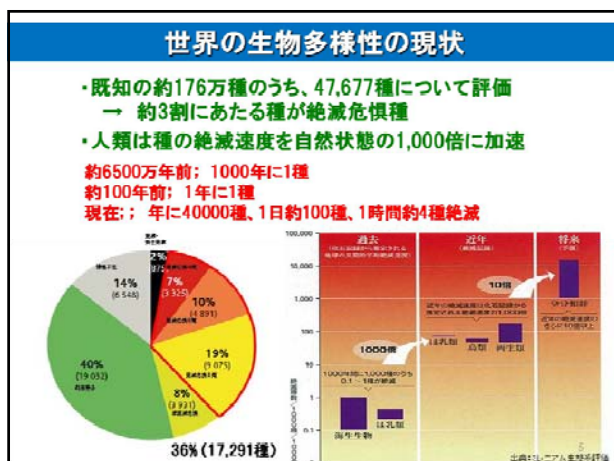
「共通だが差異のある責任」原則に基づき:

- ① 先進国全体で1990年比で少なくとも5%の削減を目標。
- ② 各国毎に法的拘束力のある数値目標設定(途上国は削減約束なし)
- ③ 柔軟性措置として、京都メカニズムを用意

対象ガス	CO ₂ , CH ₄ , N ₂ O, HFC, PFC, SF ₆ の6種類
吸収源	森林等の吸収源によるCO ₂ 吸収量を算入
基準年	1990年(HFC, PFC, SF ₆ は1995年)
目標期間	2008年~2012年の5年間
数値目標	日本-6%, 米国(未批准)-7%, EU-8%等

・日本は2002年6月4日に締結

・京都議定書は2005年2月16日に発効



生物多様性条約第10回締約国会議(CBD/COP10)

— 国連地球生きもの会議 —

■ 生物多様性条約 ■

■ 経緯

- 1992.5 採択(リオ地球サミット)
- 1993.5 日本が条約を締結
- 1993.12 条約発効
- 締約国数 192ヶ国及びEU[未批准]

■ 条約の目的

- ① 生物多様性の保全
- ② 生物多様性の構成要素の持続可能な利用
- ③ 遺伝資源の利用から生ずる利益の公正で衡平な配分

■ 場所: 愛知県名古屋市

■ 期間: 2010年10月11日(月)~29日(金)

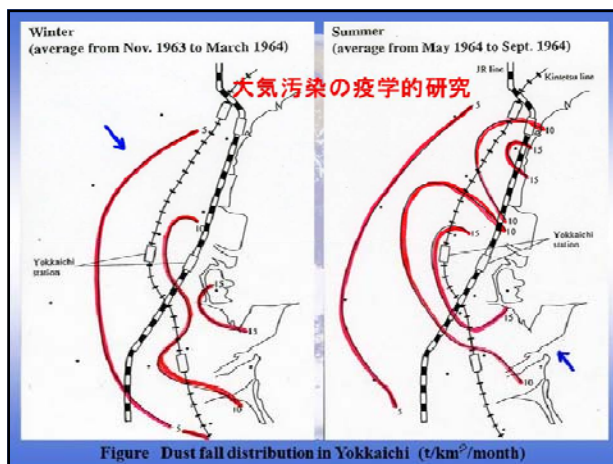
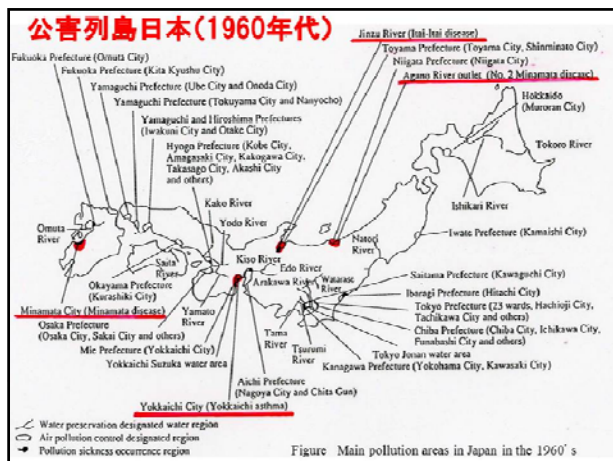
- 開僚級会合 10月27日~29日
- カルタヘナ議定書第5回締約国会議(MOP5) 10月11日~15日

■ 参加者: 締約国193カ国、国際機関、NGO等オブザーバー他

- サイドイベント等の参加者を含め、約10,000人の参加を想定

■ 標語: 「いのちの共生を、未来へ」
"Life in Harmony, into the Future"

(1) 生物多様性2011年以降の目標 → 名古屋目標
(2) 遺伝資源の取得及び利益配分(ABS)に関する国際レジームの作成 → 名古屋議定書



四日市公害から学ぶ「四日市学」

四日市公害訴訟判決(1972.7.24) ・企業の共同責任、共同不法行為の認定 ・大気汚染と喘息などの非特異的閉塞性肺疾患の「疫学的因果関係論」の認定 環境政策(総量規制)・最先端の環境技術 ・公害防止条例の改正(1971年) ・全国初の総量規制公布(1972年) ・環境技術 ・四日市ニシアチブ	(1) 法制度の整備 (2) 環境政策 (3) 環境技術 (4) 企業の環境倫理・社会的責任(CSR) (5) 環境ビジネス (6) 地域住民の連携・参画 ・市民ガバナンス ・持続可能な社会構築 ・産学官民の協働型地域づくり (7) 人材養成 ・持続発展教育(ESD) ・実践的環境教育のツール(四日市学) → 三重大学共通教育(2004~現在) - 約1,500名が受講(毎年新入生の1/5) (8) 認識共同体の構築 ・各セクターとのネットワーク ・国際環境協力(アジア)
--	--



ESD in 三重 2014
持続発展教育(ESD)に関するユネスコ世界会議2013.11.10-12 愛知・名古屋

ユネスコスクール支援大学間ネットワーク (ASPINet) は、ユネスコスクール等及び加盟大学等が、環境教育及び持続可能な開発に関する活動、ユネスコスクールのESDを中心とする活動を実施するために必要な活動を行っています。

日本初！(総合大学) 三重大学のユネスコスクール認定 (2009.8.21)

北海道教育大学新緑校 (ESD推進センター)、電子大学、東北大学国際環境科学研究所、宮城教育大学、立教大学ESD研究センター、主川大学教育学部、鹿児島大学、三浦大学、奈良教育大学、岡山大学、九州大学国際文化研究センター

【協賛大学】 (2011年12月現在)

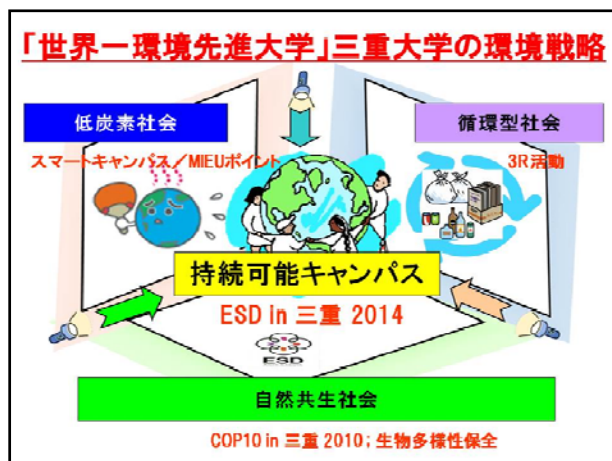
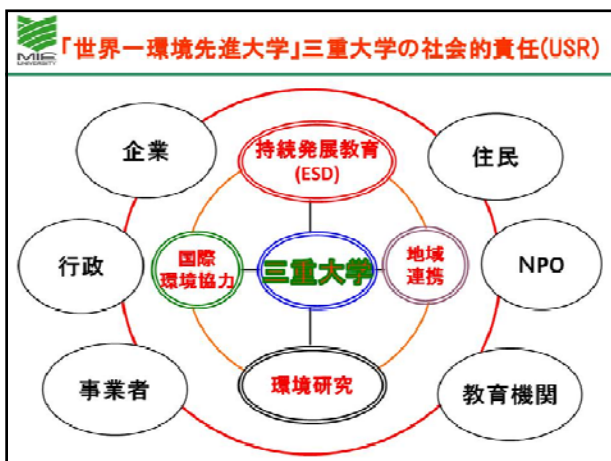


UNESCO Education for Sustainable Development (ESD) in Mie 2014

1. Date: Nov. 6 - 12, 2014
2. Venue: MEIPL (Mie University), Kumanokodo (UNESCO World Heritage), Toba, Aichi- Nagoya
3. Theme: Education for Sustainable Development (ESD)
4. Invitation: Member universities faculty members and students under the Asian Universities Consortium
5. Special Lectures & Keynote Lectures
6. Students Workshop
7. Students Statement Declaration for ESD
8. Excursion: Marine Field Study by SEISUMARU (Mie University Vessel), Culture Activities (Kumanokodo, Toba Sea Folk Museum, Woman-Diver Hut etc.)
9. Strategic Meeting: International Collaborated Research, Educational Exchange Program and Strengthen the Asian Universities Consortium for future
10. Others

「ESD in 三重 2014」
～アジア・太平洋持続発展教育(ESD)ユース世界会議～

- (1) 持続発展教育(ESD)に関するユネスコ世界会議パートナーシップ事業
 - ① 伊勢湾海上国際環境学習 2014.11.7(金)or11.10(月)
(アジア・太平洋ユース伊勢湾上環境学習: 勢水丸)
 - ② ESDエキスカージョン (2014.11.8(土) - 11.9(日))
(鳥羽海の博物館・海女小屋・熊野古道)
 - ③ アジア・太平洋環境コンソーシアムESD国際シンポジウム (2014.11.10(月)); 三重大学環境・情報科学館 (MEIPL)
 - ④ アジア・太平洋持続発展教育(ESD)ユース宣言 (2014.11.11(火)); 名古屋国際会議場
- (2) 三重大学ブース設置 2014.11.10(月) - 13(木); 国際会議場
- (3) 「ESD in 三重 2014」広報誌(日本語版・英語版)発行
- (4) 「ESD in 三重 2014」特別番組製作・上映(三重テレビ)
- (5) 三重大学環境報告書2015(日本語版・電子ブック・冊子)発行



基 調 講 演

日本におけるESDの推進について

～ あなたの毎日が、未来になる ～

三重大学ユネスコスクール2013研修会／シンポジウム
2014年2月15日

文部科学省国際統括官補佐 本村 宏明（日本ユネスコ国内委員会事務局）



- I 持続可能な開発のための教育 (ESD)について
- II 我が国のユネスコスクール
- III ESDの視点に立った学習指導の目標
- IV ESDの取組
- V ESDに関するユネスコ世界会議
- VI グローバル人材の育成に向けたESDの推進



I 持続可能な開発のための教育 (ESD)について

Sustainable Development (持続可能な開発)とは…

「将来の世代が自らのニーズを充足する能力を損なうことなく、今日の世代のニーズを満たすこと」

※ 国連「環境と開発に関する世界委員会(ブルントラント委員会)」
報告書『我ら共通の未来(Our Common Future)』(1987年)
における定義

持続可能な開発のための教育(ESD)

とは…

「持続可能な社会の担い手を育む教育」

1



万人のための教育(Education for All)

世界教育フォーラム（ダカール,2000年）で合意された6つの目標

- 1) 就学前保育・教育の拡大
- 2) 全ての子ども達が無償で質の高い義務教育へのアクセスを持ち、修学を完了
- 3) 全ての青年及び成人の学習ニーズが、適切な学習プログラム及び生活技能プログラムへの公平なアクセスを通じて実現
- 4) 識字率の50%改善
- 5) 教育における男女の平等を達成
- 6) 教育の全ての局面における質の改善

2



「学習：秘められた宝」
(ユネスコ「21世紀教育国際委員会」,1998年)

学習の四本柱

- 1) 知ることを学ぶ
- 2) 為すことを学ぶ
- 3) 共に生きることを学ぶ
- 4) 人間として生きることを学ぶ

3



国連持続可能な開発のための教育の10年

(United Nations Decade of Education for Sustainable Development)

- 2002年 ヨハネスブルクサミットで我が国が提案
- 2002年 国連決議(第57回総会)
 - ・ 2005～2014年の10年
 - ・ ユネスコを主導機関に指名
- 2005年 DESD国際実施計画をユネスコにて策定
 - 全体目標：持続可能な開発の原則、価値観、実践を、教育と学習のあらゆる側面に組み込んでいくこと
- 2009年 ESD世界会議(ボン)
 - ・ ボン宣言の採択
- 2014年 持続可能な開発のための教育(ESD)に関するユネスコ世界会議（愛知県名古屋市／岡山市）

4



ESDに関する我が国の取組

- 2005年 内閣官房に関係省庁連絡会を設置
- 2006年 DESD国内実施計画を策定
- 2011年 DESD国内実施計画を改定

基本的考え方(国内実施計画)

ESDは、持続可能な社会づくりの担い手となるよう個人を育成する教育。

特に、

- ・ 人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと。
- ・ 個人が他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性の中で生きており、「関わり」、「つながり」を尊重できる個人を育むこと。



5

ESDに関する文部科学省の取組

日本ユネスコ国内委員会

- 2003年「国連持続可能な開発のための教育の10年」に関してユネスコが策定する国際実施計画への提言
- 2007年「持続可能な開発のための教育の10年」の更なる推進に向けたユネスコへの提言
→ 同年第34回ユネスコ総会でESD推進のための決議へ
- 2008年 持続発展教育(ESD)の普及促進のためのユネスコスクール活用について(提言)
- 2012年 ユネスコスクールガイドラインについて

6

学習指導要領の改訂(2008年3月公示)

新学習指導要領(2008年3月、2009年3月)

小学校学習指導要領の総則や理科、社会、中学校学習指導要領の理科、公民、地理、高校学習指導要領の地理歴史、公民などに持続可能な社会の構築の観点が盛り込まれている

7

教育振興基本計画におけるESDについて

教育振興基本計画(平成20年7月1日閣議決定)

第3章 今後5年間に総合的かつ計画的に取り組むべき施策

(1) 基本的考え方

②「縦」の接続:一貫した理念に基づく生涯学習社会の実現
また、ユネスコ国際連合教育科学文化機関においては、地球の視野で考え、様々な課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組み、持続可能な社会づくりの担い手となるよう一人一人を育成する教育(「持続発展教育 / Education for Sustainable Development (ESD)」)が提唱されており、2005年から2014年までの10年間は、「国連持続発展教育の10年」と位置付けられている。地球の規模での持続可能な社会の構築は、我が国の教育の在り方にとっても重要な理念の一つである。

(3) 基本的方向ごとの施策

④いつでもどこでも学べる環境をつくる

【施策】

◇ 持続可能な社会の構築に向けた教育に関する取組の推進

一人一人が地球上の資源・エネルギーの有限性や環境破壊、貧困問題等を自らの問題として認識し、将来にわたって安心して生活できる持続可能な社会の実現に向けて取り組むための教育(ESD)の重要性について、広く啓発活動を行うとともに、関係府省の連携を強化し、このような教育を担う人材の育成や教育プログラムの作成・普及に取り組む。特に、ESDを主導するユネスコの世界的な学校ネットワークであるユネスコスクール加盟校の増加を目指し、支援する。

8

第2期教育振興基本計画(平成25年6月14日閣議決定)

第1部 我が国における今後の教育の全体像

Ⅲ 四つの基本的方向性

(1) 社会を生き抜く力の養成～多様で変化する社会での個人の自立と協働～

(今後の学習の在り方)

○ 持続可能な社会の構築という見地からは、「関わり」「つながり」を尊重できる個人を育成する「持続可能な開発のための教育(ESD)」の推進が求められており、これは「キー・コンピテンシー」の養成にもつながるものである。

第2部 今後5年間に実施すべき教育上の方策

Ⅰ 四つの基本的方向性に基づく方策

1. 社会を生き抜く力の養成

(4) 生涯の各段階を通じて推進する取組

基本施策11 現代的・社会的な課題に対応した学習等の推進

【基本的考え方】

○ 現代的・社会的な課題に対して地球規模で考え、自らの問題として捉え、身近なところから取り組み、持続可能な社会づくりの担い手となるよう一人一人を育成する教育(持続可能な開発のための教育:ESD)を推進する。

【主な取組】

11-1 現代的・社会的な課題等に対応した学習の推進

ユネスコスクールの設置局面における充実等を通じ地球規模での持続可能な社会の構築に向けた教育(持続可能な開発のための教育:ESD)を推進する。

9

Ⅱ 我が国のユネスコスクール

ユネスコ憲章に示されたユネスコの理想を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校

◆ 参加資格

- 就学前教育・小学校・中学校・高等学校・技術学校・職業学校、教員養成学校、特別支援学校等(国公立を問わず)

- ユネスコの理念に沿った取組を継続的に実施していることが必要

10

ユネスコスクールガイドライン

(2012年8月20日 日本ユネスコ国内委員会)

ユネスコスクールとして大切なこと

- ユネスコスクールの活動には、次のようなことが大切ですので、各学校におかれては、これらの点を念頭において活動いただくことを期待しております。
- 国内外のユネスコスクール相互間のネットワークを介して、互いに交流相手の良さを認め合い、学び合うこと。
- 地域の社会教育機関、NPO等との連携などを通じて、開かれたネットワークを築くよう努めること。
- 校内外における各種研修の充実・活用を図るなど、ユネスコスクールの活動を通じて広く学校外にも働きかけ、我々人類社会が持続的に発展するよう心がけること。
- 学校経営方針等にユネスコスクールの活動に取り組むことを明確にし、学校全体で組織的かつ継続的にユネスコスクールの活動に取り組みやすくすること。
- ユネスコスクールの活動を自らの学校評価の項目に盛り込み、活動の質の向上に努力すること。
- 必要に応じ、ASPUnivNet[1]加盟大学をはじめとする高等教育機関の支援や協力を得ながら、ユネスコスクールの活動の充実にも努めること。

[1] ユネスコスクールのパートナーとして、ユネスコスクールの活動を支援する大学のネットワーク。

17

持続発展教育（ESD）推進拠点として大切なこと

ユネスコスクールが持続発展教育（ESD）推進拠点として発展していくには、次のようなことが大切ですので、各学校におかれては、これらの点を念頭において活動いただくことを期待しております。

- 持続発展教育（ESD）を通じて育てたい資質や能力を明確にし、自分で、あるいは協働して、問題を見出し解決を図っていく学習の過程を重視した教育課程を編成するよう努めること。
- 総合的な学習の時間を中心とした教科横断的な指導計画を立てるなど、指導内容を適切に定め、さらに、指導方法の工夫改善に努めること。
- 持続発展教育（ESD）の推進拠点として、研究・実践に取り組み、その成果を積極的に発信することを通じて、持続発展教育（ESD）の理念の普及に努めること。

18

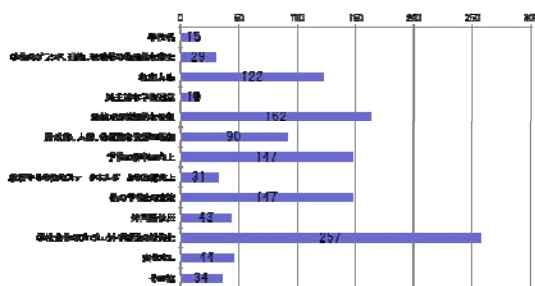
持続発展教育（ESD）とは、持続可能な社会づくりの担い手を育む教育であり、その中には、国際理解、環境、多文化共生、人権、平和、開発、防災などテーマ・内容が含まれます。従って、持続発展教育（ESD）で取り上げるテーマ・内容は必ずしも新しいものではありません。むしろ、それらを持続発展教育（ESD）という新しい視点から捉え直すことにより、個別分野の取組に、持続可能な社会の構築という共通の目的を与え、具体的な活動の展開に明確な方向付けをするものです。また、それぞれの取組をお互いに結び付けることにより、既存の取組の一層の充実発展を図ることを可能にします。

持続発展教育（ESD）の実施においては、「人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと」や、「他人、社会、自然環境との関係性を認識し、関わり、つながりを尊重できる個人を育むこと」の観点が必要です。持続発展教育（ESD）の理念は、現行の教育振興基本計画（2008年7月策定）に盛り込まれていますし、学習指導要領（2008年、2009年公示）で示されている「生きる力」という理念にも通ずるものです。

19

ユネスコスクールアンケート

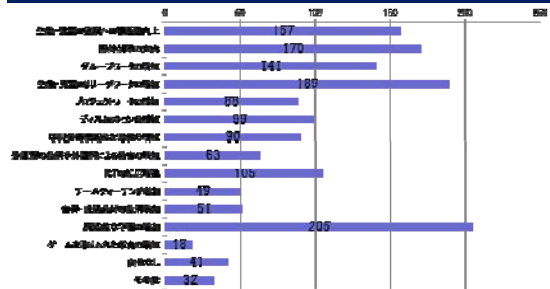
Q.ユネスコスクールに加盟した結果、学校等どのような変化が見られました？（複数回答可）



平成24年度実施 ユネスコスクールアンケートより

20

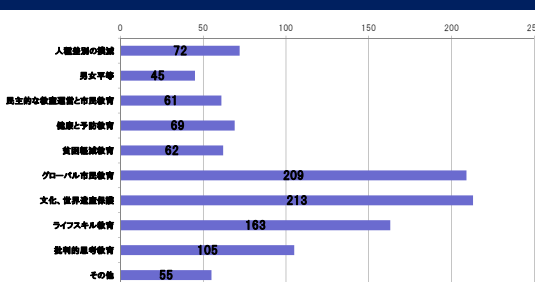
Q.ユネスコスクールに加盟した結果、教授方法にどのような変化が見られました？（複数回答可）



平成24年度実施 ユネスコスクールアンケートより

21

Q.今後のユネスコスクールの活動について、特に重視すべきと考え分野を選択してください。（複数回答可）



平成24年度実施 ユネスコスクールアンケートより

22

ユネスコスクール間の交流

■ ユネスコスクール全国大会

日 程:平成25年12月1日(日)

開催地:東京都多摩市

テーマ:ESDのさらなる発展を目指して

ー2014年ユネスコスクール世界大会を見据え

■ ユネスコスクール地域交流会in広島

日 程:平成25年12月7日(土)

開催地:広島県広島市

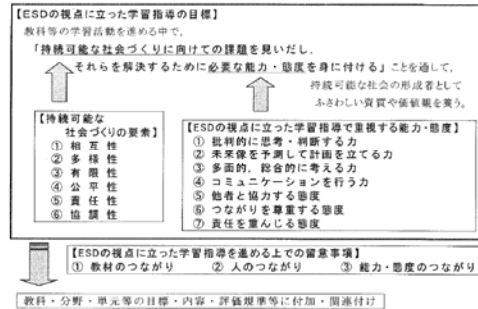
23



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN

Ⅲ ESDの視点に立った学習指導の目標



出展:国立教育政策研究所「学校におけるESDに関する研究(最終報告書)」

24



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN

Ⅳ ESDの取組

1.日本/ユネスコパートナーシップ事業

日本ユネスコ国内委員会では、知的交流を通じた国際連合教育科学文化機関(以下「ユネスコ」という)に関する活動の更なる振興に取り組むこととしている。ユネスコの理念及び目的の実現に向けて、日本ユネスコ国内委員会が必要と考える事業を国内のユネスコ活動に関係のある機関及び民間団体等へ委託し、広く国民のユネスコ活動への参加の促進、更にはユネスコ活動の普及と理解の促進を図る。今年度は、持続可能な開発のための教育(ESD)の普及・促進のため2014年に行われる「持続可能な開発のための教育(ESD)に関するユネスコ会議」を見据えた活動の実施をテーマにし、審査委員会を経て委託事業者を選定した。

○2013年度主要な日本/ユネスコパートナーシップ事業
・ASPUnivNet運営管理事業(国立大学法人岡山大学)

・ユネスコスクール地域交流会in広島(公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター)

・第5回ユネスコスクール全国大会(NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム)

・ESDの10年・地球市民会議2013「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラム)

・ESDに関するユネスコ世界会議「ユース・コンファレンス」に向けた国内の若者によるプレ・コンファレンス「ESD日本ユース・コンファレンス」(公益財団法人五井平和財団)

25



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN

日韓教職員交流

➤ 背景

2000年 日本政府による韓国初等中等教育教員の招へいを開始。

2005年 韓国政府による日本の教職員招へいを開始。

過去13年間で約2000名の教員が相互訪問。

2007年度より、ESDをテーマ

○2013年度 派遣プログラム 50名

招へいプログラム 120名

➤ 目的

・両国の学校及び地域社会における持続可能な開発のための教育(ESD)と国際理解教育(EIU)の好事例を探る。

・教育経験を交換する機会を提供し、日韓両国の教育の質を高める。

・日韓教職員のネットワーク構築・強化に寄与する。



26



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN

ESD日米教員交流

➤ 背景

日米両国政府(文部科学省と米国防務省)の共同提案により、2009年度開始

ESDを共通のテーマに、日米教員間で相互交流、意見交換、共同研究

参加者自身が取り組み、共同で大きなアウトプットを求められる参加型プログラム

○平成25年度 派遣プログラム 24名

招へいプログラム 24名

➤ 目的

・両国の教員交流推進により日米両国

の相互理解と友好を促進する

・ESDをテーマに、地域の実例を知ると

ともに、意見交換、共同研究による日

米の教育交流をはかる



27



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN

SEAMEO(東南アジア教育大臣機構)

ーJapan ESD Award

➤

2012年「SEAMEO-Japan ESD Award」を創設

➤ 東南アジア地域でESDに係るGP校を表彰、地域での交流を図る。

➤ 文部科学省とSEAMEOが共催。パートナーとしてユネスコ・バンコク事務

所、SEAMEO各センターが参加

➤ 対 象 :SEAMEO加盟国内の小・中・高等学校

➤ 2013年 第2回受賞校(テーマ:Values Education)

第1位 サイディナ・ハサン中等学校(ブルネイ・ダルサラーム国)

事業名:環境に対する意識 3Rから6Rへ

第2位 サティア・サイ学校(タイ)

事業名:ヒューマン・バリュー教育プログラム

第3位 コタ・キナバル市中等学校(マレーシア)

事業名:私たちはあなたに愛情をそそぐ

特別賞 ナシアンピタヤサン学校(タイ)

事業名:学校の森におけるハーブの伝統的知識の学習プロジェクトによる

思考能力の開発

28



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN

V 持続可能な開発のための教育(ESD)に関するユネスコ世界会議

- (1) 愛知県・名古屋市で開催される閣僚級会合
及び全体の取りまとめ会合
2014(平成26)年11月10日(月)から12日(水)
11月13日(木)国内の関係者によるフォローアップ会合開催
- (2) 岡山市で開催される各種ステークホルダーの
主たる会合
①ユネスコスクール世界大会
2014(平成26)年11月6日(木)～8日(土)
②ユース・コンファレンス
2014(平成26)年11月7日(金)
③持続可能な開発のための教育に関する拠点の会議
2014(平成26)年11月4日(火)～7日(金)



29

ユネスコスクール世界大会の概要

ユネスコスクール世界大会は、「ユネスコスクール全国大会」「Student(高校生)フォーラム」及び「教員フォーラム」の3つのフォーラムで構成される。(主催:ユネスコ、文部科学省、日本ユネスコ国内委員会)

【Student(高校生)フォーラム】

日程 2014年11月6日(木)～7日(金)
参加者 1チーム5名(教員1名、Student(高校生:15～18歳)4名)
海外から33チーム165名(教員33名、高校生132名)、日本から9チーム 45名(教員 9名、高校生 36名)
合計 42チーム 210名(教員42名、高校生168名)

成果 * 参加者(高校生)が各国のユネスコスクールにおいて行われてきた国連持続可能な開発のための教育(ESD)の実践を発表、共有する。
* 各国の課題を踏まえ、共通の未来を創るために協働して取り組むことを確認し、宣言文をまとめる。
* その宣言は、ユネスコスクール全国大会のメッセージに添付し、愛知県名古屋市で開催される「国連持続可能な開発のための教育(ESD)」に関するユネスコ世界会議」において、発表する。

【教員フォーラム】

日程 2014年11月7日(金)
参加者 上記Student(高校生)フォーラムに参加するチームの教員42名

【全国大会】

日程 2014年11月8日(土)
参加者 日本のユネスコスクールの教員、都道府県・市区町村教育委員会、ユネスコスクール協力者(企業、NGO/NPO、PTA、大学生、専門家など)、国外ユネスコスクール(教員フォーラム参加教員等)、ユネスコスクール支援大学間ネットワーク(ASP Univnet)

30

ESDに関するユネスコ世界会議の成果について (ユネスコ事務局案)

「ESDに関するユネスコ世界会議」の最終日の全体会合では、宣言の採択を得て、ステークホルダーからのコミットメントを含めた「ESDに関するグローバルアクションプログラム」のハイ・プロファイルな発表を実現する。

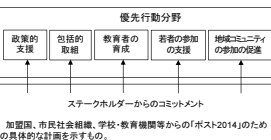
宣言

ISGに語りつつ、ユネスコによって事前に草案が作成され、「ESDユネスコ世界会議」での議論を踏まえて内容が固められる。

- (1) UNとリウネンユネスコの位置付けを明確にしつつ、DESD以降にESDを更に発展させるための政治的な関与を確認する。
- (2) 質の高い教育の不可欠の要素としてのESDを強化する。
- (3) 持続可能な開発のための触媒としてESDを強化する。
- (4) ESDに関するグローバルアクションプログラムを開始する。

ESDに関するグローバルアクションプログラム

「国連ESDの10年」の後継プログラムとしての位置付けであり、「ESDユネスコ世界会議」で下記5点を優先分野として発表される。各ステークホルダーからのコミットメントは、テンプレートを用いて収集される。



31

ESDに関するグローバルアクションプログラム (2015-)【案】について

1. 目的

グローバルアクションプログラムは、持続可能な開発を加速するために、教育・学習の全ての段階・分野で行動を起こし強化するためのものである。この目的は、二つの目的がある。

- (1) 全ての人が知識、技能、価値観、態度を得る機会を持つために、教育・学習を再方向付けし、持続可能な開発に貢献するよう能力向上すること。
- (2) 持続可能な開発を促進する全ての関連アジェンダ・プログラム・活動において、教育・学習の役割を強化すること。

2. 優先分野

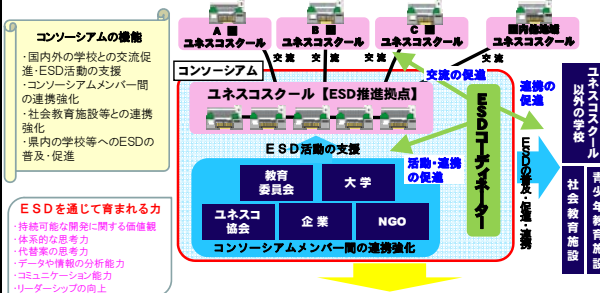
グローバルアクションプログラムは、戦略的に焦点を合わせ、ステークホルダーのコミットメントを可能とするために、5つの優先行動分野に焦点を合わせる。

- (1) 政策的支援
- (2) 包括的取組
- (3) 教育者の育成
- (4) 若者の参加の促進
- (5) 地域コミュニティの参加の促進

32

VI グローバル人材の育成に向けたESDの推進

教育委員会及び大学が中心となり、ユネスコ協会及び企業等の協力を得つつ、ESDの推進拠点であるユネスコスクールとともにコンソーシアムを形成し、ESDの発展・普及及び国内におけるユネスコスクール間の交流等を促進する。コンソーシアムに置かれるESDコーディネーターにより、教育委員会、大学、ユネスコ協会及び企業等のコンソーシアムメンバーの活動・連携の促進、学校、社会教育施設等の国内でのESDに関する連携強化及び国内における交流の円滑化を図る。



国内外における交流の円滑化、ESD活動の一層の推進

33

ESDストーリーブック “ESD QUEST(イーエスディー クエスト)”



「ESD QUEST」ダウンロードURL

<http://www.mext.go.jp/unesco/004/1339957.htm>

34

ご静聴ありがとうございます

日本ユネスコ国内委員会Webサイト <http://www.mext.go.jp/unesco/>
日本ユネスコ国内委員会Facebook <http://www.facebook.com/jpnatcom>
ESD Facebook <https://www.facebook.com/esd.jpnatcom>
政府インターネットテレビ「徳光 & 本佐の知りたいニッポン！」
<http://nettv.gov-online.go.jp/prg/prg8095.html>



記 念 講 演

石原義剛 海の博物館館長
三重大学客員教授

海女とは

大海原にでて、ほぼ 50 秒の間に、素潜りで海面と海底を往復し、アワビ、サザエや海藻類を追い求めることを生業とする女性を「海女（あま）」と呼びます。そんな海女は世界の海に、日本と韓国にしかいません。日本では列島の西を中心に 18 の県に 2174 人（2010 年調査）が確認されています。

韓国では済州島に 4881 人（2012 年）と本土の約 5000 人（推定）を合わせた約 10,000 人がいます。韓国の海女の歴史は済州島が古く、本土へは 1890 年代から済州海女が進出し、次第に拡散していきましたが、現在は多く沿岸各地で在地の人が海女漁をしています。

日本列島では、少なくとも 3000 年以上前から潜水漁をする男女がいたものと考えられています。そんな長い伝統を有する海女を、日本でもっとも多く半数近い 973 人を占める三重県と韓国済州道（県）が中心となって、日韓共同して、「海女」をユネスコ（世界）無形文化遺産に登録しようと活動を進めています。去る 2013 年 10 月 26, 7 日、石川県輪島市で開催された第 4 回「海女サミット」には 12 県から 140 人の海女の参加があり、連携の輪が広がりつつあります。

なんといってもその動機は海女の急激な減少にあります。最盛時には 17000 人（1956 年）ほどいたのが、ほぼ 2000 人に減ったのですから、大変な減りようです。しかし、海女がいなくなってもいいではないか、海女でなく男海士でもいいし、ほかの漁法もある、極端な人はアワビや海藻は養殖が発達しているから、海女だけを残してもしかたがないだろう、という人もいます。そうでしょうか。

わたしは、海女は単なる海で働く女性という珍しい存在だけではなく「海女文化」の担い手だから、どうしても残してゆかねばならないと考えています。その理由を 6 つにまとめて見てみました。

古来より生業としての海女

1 つ目は、やはり**素潜り潜水**という特別な技術を身に付けた自立した女性だと云うことです。海女になったばかりの若い女性と経験 30 年 40 年の、50 代 60 代の海女では明らかな漁獲の差があります。海女独特の潜水法の熟達と長年の経験による漁場の熟知です。子どもころから、早く海底に届く潜水の訓練を遊びの中で覚えてきた海女たちは、海底を目がけて真っ直ぐに最短距離で潜ります。それが呼吸を獲物探しに少しでも多く使える潜水法なのです。さらに海中の潮の流れは複雑多岐ですし、アワビやサザエの棲む岩礁は位置も形も複雑です。それらを総て知っているからこそ優れた海女なのです。特別な技術をもつ彼女たちは、海中では誰にも頼ることのない自立した女性です。

2つ目は、そんな**海女の歴史がどんな生業を営む民よりも長い**と云うことです。各地に残る縄文時代の遺跡から、大量のアワビ殻とともに鹿角製や鯨骨製のアワビオコシと呼ばれる道具が出土します。間違いなく潜水をしてアワビを獲っていた女性がいたことを証拠づけています。以降、狩猟の民マタギとともに漁撈の民アマは3000年とも5000年とも云える長い歴史を重ねています。それは為政者や貴族のではない、名も無い無事の女性の歴史として間断なくつづいて来たのです。

海と共に生きる

3つ目は、**持続性のある資源維持のやり方を守って来た**ことです。海女の歴史が長く続いてきたのは、目的とする漁獲物が無くならなかったためです。今日風にいえば、持続性のある資源維持のやり方を工夫し、乱獲をしない約束事を守ってきたからです。海女は度々資源枯渇の危機に直面してきました。例えばガラスの水中眼鏡が開発された時、アワビの乱獲が心配され、多くの漁村では10年近く禁止にしました。その後、便利さには勝てず使用されるようになりましたが、多くの漁獲量を制限する規約を決めるようになりました。採捕するアワビ、サザエの大きさや採捕期間は法令で規定するほどになりました。結果は資源を守ることになり、海女漁の持続性が維持されてきたのです。

4つ目は、**海女の自然との共生**です。海女の漁獲の目的はアワビ、サザエ、ウニ、ナマコなどの動物とワカメ、ヒジキ、テングサなどの海藻すなわち植物です。海女の活動する海には自然なる海の生態系が確実に存在し、海女が参加することで「里海」という共生関係が出来上がっています。海女はそこから大きな海の恵みをもらっているとともに、無意識のうちに生態系を守る役割をはたしています。これまでは無意識だった自然なる海を守る役割を、共生関係を大切にして、はっきりした意識を持って守ってゆきます。

漁村の要として

5つ目は、**海女が漁村という共同体社会の要になっている**ことです。人間社会が共同体社会であることは云うまでもありませんが、とくに漁村の人々は生産基盤を共有しており、生産活動の多くを参加者の助け合いに依存しています。そして今日では希薄化が進んできたとはいえ日常生活の多くのところで共同体が生きています。その中心に海女がいます。海女は自立していると云いましたが、船を操ったり道具を作ったり漁場を記憶したりする男性の役割も欠かせませんし、それをよく知っています。まさに男女共同参画の共同体社会であります。

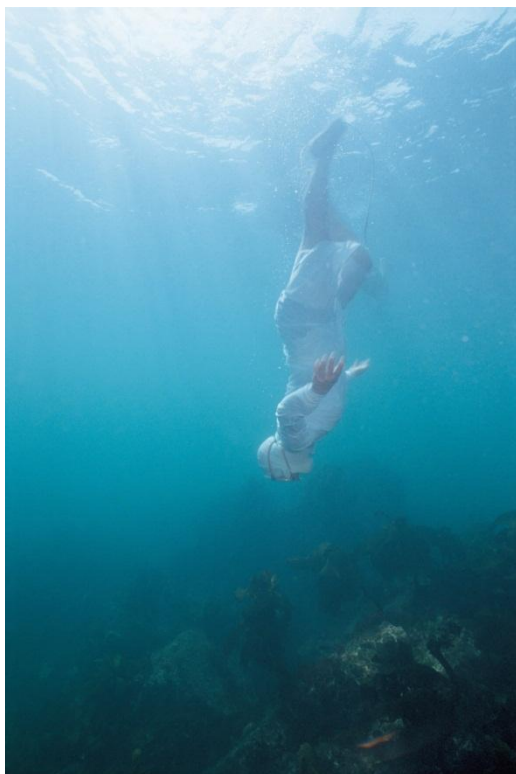
6つ目は、**海女が存在形態が多様だ**ということです。石川県輪島の海女はほぼ一年を海で暮らす専門的な操業形態をとっています。三重県鳥羽市石鏡の海女もほぼ海で暮らしを立てています。千葉県では冬磯は禁止といって、10月に漁期が終わると次の春まで海女漁は行われません。同じ三重県鳥羽市和具浦の海女は年間7日間しか潜水作業をしません。操業日数だけでもこんなに差があります。多くの収入を得るために潜る海女もいれば、楽しみで短時間の漁に出る80～90歳の老海女がいます。

存在形態のこの多様性は、海女の強かさを表わしています。海で働くばかりでなく、畑

仕事もすれば、旅館の手伝いにも出ますし、出稼ぎもします。そして最後に帰ってくる海があります。子育ての終わった女性が海女をはじめる姿がどこでも見られます。

科学技術が発達した結果、人間は次第にきつい肉体労働から解放され、経験の蓄積による知識さえ必要としない、ロボットとコンピュータが労働に代わる時代が来ています。そんな時代に海女が存在することは奇跡とさえ考えられるでしょう。なんで今更「素潜り」なのだろうか。しかし、水中での「50 秒の勝負」に危険をも顧みず挑戦しつづける海女たちは、陸に上がった時、屈託なく楽天的です。焚火で身体を温めながら仲間と話す彼女たちの間には笑いが絶えません。海女は自分の頭脳で判断して獲物を探し、自分の肉体で獲物を獲る、その楽しさ、働くことの根底にある楽しさを知っています。それは人間が遠い祖先から受け継いできた生き方だと信じています。

今わたしたちは、長く受け継がれてきた祖先からの経験を、海女文化として残して行きたいと思っています。



写真：素潜りする海女

ユネスコスクール活動 事例報告

①アジア・太平洋青少年環境フォーラム 2013

②年間を通した取り組みと意識の定着
つながり合う個を目指して

③平成 25 年度ユネスコスクールとしての取り組み

④ギフチョウから考える薦原の自然と未来

⑤三重大学環境 ISO 学生委員会の活動紹介
～世界一の環境先進大学を目指して～

⑥三重大学国際交流センター留学生
「海との出会い」

アジア・太平洋青少年 環境フォーラム 2013

アジア・太平洋青少年環境フォーラム 2013

2013年8月4日～9日

名張市立北中学校
2年 竹内 健人
名張市立南中学校
3年 玉村 優香
2年 村井 貴哉

Moving Toward a Green Future

- **Vehicles in Japan**
 - **Cars**
 - **Car Companies in Japan**
 - **What Are Eco Cars?**
 - **How Do We Recycle Cars?**
 - **Bikes**
 - **Bikes in Japan**
 - **Bike Solutions**
 - **Conclusion**
- 

Vehicles in Japan



Car Companies in Japan

SUBARU

HONDA
The Power of Dreams

TOYOTA

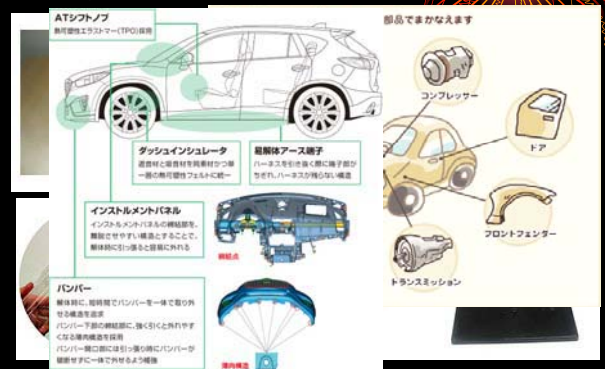


SUZUKI

What Are Eco Cars?



How Do We Recycle Cars?



Bikes in Japan



Good Solutions for Bikes Japan









年間を通した取り組みと意識の定着
つながり合う個を目指して

附属の特性を生かした取り組みを

年間を通した取り組みと意識の定着

つながりあう個

を目指して

三重大学教育学部附属中学校
副校長 前田 豊美

附属中学校が目指す生徒像

- 積極的に学び続け、豊かに表現しようとする生徒
- なかまを大切に、互いに高めあう生徒
- 心身ともに健やかに成長する生徒

ESDを通して
目指す生徒像に近づくために

- 国際交流学習
- 人権学習
- 環境学習

の取り組みの充実

1 国際交流学習

- ・天津市実験中学校との交流の工夫
- ・生徒会、活動部を通して交流
英会話に力を入れ、他国籍の人たちと積極的にコミュニケーションをとる

(今年度、TV電話会議システム導入)

- ・使用済み切手や書き損じハガキの収集に積極的に参加

世界の子ども達の医療援助活動に役立つ取り組みや
親子国際交流に参加する

- ・世界遺産を守る運動を通して自国の文化や世界の文化に触れる

先達から受け継いだ文化を大切にする

2013年
天津師範大学実験中学校90周年記念事業



2012年
Asia-Pacific
youthWater forum 2012



天津実験中学校訪問

2011. 11



日本文化講座



生徒会交流



中国文化講座



天津実験中学校来日

2010. 8

交流セミナー



京都視察

天津パフォーマンス



2. 人権学習

- 国際交流から学ぶ多くの国々の生活感覚
- コミュニケーションを大切にする意味を考える
- 思考・判断・表現を大切に授業のためのグループ学習
- 充実した体験学習の経験
- 環境学習を通しての人の生きる権利を考える

研修を増やし、教師の力量をあげる

3. 環境問題

- ・ 総合的な学習の時間、教科を統合し、東日本大震災と阪神淡路大震災から学ぶ

- ・ 『今、自分たちができることは何か』を考え、行動にうつす
- ・ 自主的な学習ができる

自分以外の誰かのために、

がんばる喜びを
感じてほしい

生徒会が中心に取り組む 学校生活での活動

- ・あいさつ運動
- ・1円玉募金、ペットボトルキャップの回収
- ・古切手や書き損じハガキの回収
- ・津ユネスコへの参加

教師と生徒の共有
生徒と生徒の共有
教師と教師の共有

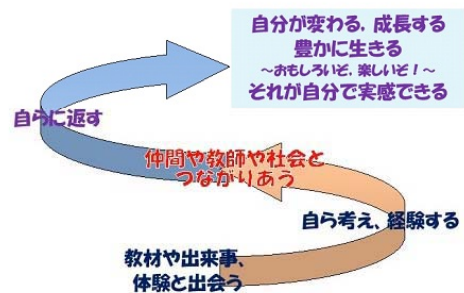


誰かのために役に立てる自分を見つける



つながりあう喜びを感じることができる

附属中学校の「学び」



ご清聴ありがとうございました

平成 25 年度
ユネスコスクールとしての
取り組み

三重県立木本高等学校
平成25年度
ユネスコスクールとしての取り組み



三重県立木本高等学校
ユネスコスクール担当 川上真由子

平成25年度 主な取り組み内容

- 奉仕活動
- 地域文化・歴史を学ぶ講演会
- 防災プロジェクト
- 熊野古道ガイド養成プロジェクト

奉仕活動

- 熊野古道浜街道七里御浜、松本峠、通学路の清掃活動
及び浜街道七里御浜の漂着ゴミ調査

(7月3日雨天により中止、3月18日に実施予定)

地域文化・歴史を学ぶ講演会

- 4月15日(月)遠足事前学習講演会(1年生)
「熊野古道のお話」
熊野古道語り部友の会 副会長 山口 朝さん
- 11月11日(月)
木本高校校歌作詞者「詩人・作家 佐藤春夫のこと」(2年生)
佐藤春夫記念館 館長 辻本 雄一さん
- 11月21日(木)「熊野古道の魅力」(1年生)
国際熊野学会常任委員 山本 殖生さん
- 11月28日(木)『大逆事件』と熊野の人々(2年生)
佐藤春夫記念館 館長 辻本 雄一さん
- 1月9日(木)「熊野古道の持続可能な観光」(1年生)
くまの体験企画代表 内山 裕紀子さん
- 1月23日(木)「三つの旅」(1年生)
熊野古道センター 所長 川端 守さん

防災プロジェクト

- 8月2日(金)
「防災プロジェクトⅢ」ーベストを尽くすためにー
①避難時の保護者への引き渡し方法についての研究
②避難時のライフジャケットの使用についての研究
③日常時の上履きについての研究

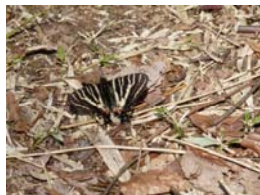
参加者: 木本高等学校生徒有志・職員有志
三重県高等学校PTA連合牟婁地区PTA有志
三重大学 川口淳准教授と学生有志
三重県教育委員会有志
熊野市職員有志

熊野古道ガイド養成プロジェクト

- 第1回勉強会(8月8日、9日)
・世界遺産についてのDVD学習
・地元の語り部さんと一緒に松本峠の踏査
- 第2回勉強会(12月19日)
・地元のガイドコミュニティKumatengさんとの意見交換会
ワークショップを通して考える「日本・熊野の魅力とは」
- ガイド実践(12月26日)
・県内の他校の生徒20名を日本語で熊野古道ガイド
- ガイド実践(1月11日)(三重大クリーンツアーへの参加)
・三重大学留学生を対象に英語・日本語で熊野古道ガイド
- ガイドトレーニング(3月に実施予定)
・三重県内のALTを対象に英語で熊野古道ガイドトレーニング

ギフチヨウから考える 薦原の自然と未来

ギフチョウから考える 薦原の自然と未来



名張市立薦原小学校
教諭 松田 淑子
環境省「平成25年度ESD人材育成事業」にて実施

ギフチョウのお話(3年時3月)



ギフチョウ観察会(4年時4月)



ギフチョウのたまご発見(5月)



ちょうちょコモコモ探偵団(TKT) 薦原生き物調査(6月・9月)



絶滅危惧種(ニッポンハナダカバチ) 発見



発信(コモコモふれあいまつり11月)



発表への感想(コモコモふれあいまつり)



映像教材の作成(12月)



ESD授業公開(1月22日2限目振り返り)



ESD公開授業(1月22日3限目話し合い)



ESD公開授業(3限目②発表)



公開授業後



ワーキング会議



第4学年

総合的な学習の時間学習指導案

2014年1月22日(水) 2・3 限

4年生教室

授業者 松田 淑子

1. 単元名「見つめよう わたしたちの自然」 ～ギフチョウから考える薦原の自然と未来～

2. 目標

- ・自分たちの住んでいる地域の素晴らしさに気づき、愛着と誇りをもつことができる。
- ・自然と人とのつながりを知り、自分たちにできることを考えることができる。
- ・学んだことをまとめ、理由を明確にしながらお互いの考えを出し合い、発信することができる。

3. 指導について

薦原小学校の児童は、団地の児童が3分の2、従来の地域の児童が3分の1の割合でいる。4年生児童は21名で、自然環境に興味を持って生活している子が多い。夏には、学校の木に集まるカブトムシやクワガタを採集したり、昆虫を捕まえて教室で飼ったりすることが好きである。登校中に摘んだ花を持ってくる子もいる。恵まれた自然環境の中で、生き生きと生活している。しかし、当たり前すぎる環境に対して、自然の豊かさや、素晴らしさを直接的に感じている子はいない。自分の生活の中に調和しすぎて、立ち止って考える機会は日常生活の中にはない。

本校では、天然記念物のギフチョウの観察を、伊賀ふるさとギフチョウネットワークの加納さんを迎え、6年前から行っている。3年生では、ギフチョウの生態や特徴について教えてもらう。その学習を受け、4年生の春に、実際に観察会に出かけている。アゲハチョウに比べ、体長は少し小さめであるが、太陽の日を体に浴び、早春の時期に活動を始める。今年は、生息地よりも離れた場所にまで、ギフチョウが飛来してきている。ますます、目的地での出会いに心が高鳴る。生息地は市の保護区に指定されており、常時入ることはできない。特別な場所に足を踏み入れ、「春の女神」に出会える緊張感は神秘性を物語っている。天候に恵まれれば、ギフチョウの姿を見ることができる。毎年、ギフチョウクイズ、森林探検、薦原地域の自然観察と半日探索をしている。体験したことにより、さらに調べたい、追求したいという意欲がわき、その後、ギフチョウについて自発的に調べ学習へとつながっていく。子どもたちは、興味をもった課題を、インターネットや本で調べるであろう。さらに、ギフチョウの卵、絶滅危惧種のニッポンハナダカバチの観察へと活動が進むことが考えられる。より子どもたちの意欲をかきたてる活動になることであろう。学習の流れは、体験→探究→発信のスパイラルで進めることができる。自然体験も春、夏、秋と薦原地域を探検し、季節の変化も感じることもできる。発信の場も、学級のみならず、学校、地域へと広げることができる。自分たちの地域を見つめることにより、持続的に学習ができる教材である。

本校の研究テーマは、「主体的に考え、伝え合って学ぶ子をめざした授業の創造」である。４年生になった子どもたちは、好奇心旺盛で課題に対して自分の考えを伝えたいという気持ちを強く持っている子が多い。しかし、友だちの考えをじっくり聞くという姿勢は薄く、自分の考えを一方向的に言うことが多い。伝えたい気持ちの強い子だけで授業が進むことが多く、何も言わずだまっただまま過ごしている子もいる。お互いの考えをしっかりと聞き、どの子も自分の考えを伝えることができる力をつけていくことが課題である。

本教材は、自ら体験したことが学習の基盤にあるので、子どもたちの伝えたいという気持ちがより強くなる。体験したことをもとに、一人ひとりが主体的に考え、相手に伝えるにはどういう方法が分かりやすいか、

お互いに意見を出し合いながら、全校発信へと進めることができると考えられる。より良いものを作ろうとする子どもたちの自主性を感じることができるであろう。また、人とのつながりの中で学ぶことができる教材であるため、人々の思いを聞くことにより、子どもたちの心に深く刻みこまれるものも大きいものがあると考えられる。各教科とのつながりを考えながら、学習の幅を広げていくことができる教材になる。

4年生の総合的な学習の時間を通して、自分の住んでいる地域を違う角度から見ることで、自分の住んでいる地域の良さを発見してほしいと思っている。また、この自然豊かな環境は、人との関わりの中において持続的に守られてきたものであり、自然と人とのバランスのよい共存がこの環境を作っていることに気づかせたい。そして、自分たちにできることは何なのか、この学習を通して考えてほしいと思っている。自分の地域を見つめ、地域に愛着と誇りをもち、地域のために行動しようとする子どもを育てていきたいと考える。

4. 指導計画（全40時間）

時間	単元	時数	内容
4月	ギフチョウを見に行こう	3	ギフチョウネットワークの加納さんたちとともに、八幡地域に生息するギフチョウを見学に行く。加納さんから、昆虫に関するクイズを出してもらい、ギフチョウを含めた昆虫について学習する。
5月	ギフチョウについて、さらに調べよう	6	ギフチョウについて、さらに調べたいことをあげ、グループに分かれて調べ学習を行う。図書室にある本や、インターネットで、生息地、食べ物、生態などを調べる。
5月	カンアオイを観察しよう	2	学校周辺の土手のカンアオイの葉の観察を行う。カンアオイの葉の裏に固まりで生んである卵を見ることができるという。
5月	調べたことを発表しよう	2	グループで調べたことを、学級の人みんなに発表をする。調べたことをテレビに映して発表を行う。
6月	全校の人みんなに発信する方法を考えよう	2	ギフチョウが生息する環境を守るために、全校の人みんなに発信する方法を考える。ポスター、紙芝居、劇などの意見などの意見が出ると予想される。
6月	薦原の自然を調べよう（夏）	4	私たちの住んでいる地域の自然環境はどんな様子か、探検に行く。探検隊の名前を考え、バッジ、旗を作る。ギフチョウネットワークの加納さんたちとともに環境調査に出かける。昆虫の名前や生態を聞き、メモを取る。植物の観察も同時に行う。
6月	調べたことをまとめよう	4	観察したことを、薦原地域にどんな種類の生き物が生息しているか、種類ごとにまとめる。
7月	絶滅危惧種の観察をしよう	1	ニッポンハナダカバチの観察をする。砂場に穴を掘り、巣を作っている。自分より、大きい昆虫もえさにして、巣に持って帰ってくる様子を観察する。
9月	薦原の自然を調べよう（秋）	4	夏の様子との違いを見つけながら、再び観察に出かける。夏とは違った昆虫や植物の発見があると予想される。
11月	全校児童、地域の方に発信しよう。	8	コモコモふれあい祭りで、今まで調べてきたことをまとめ、ギフチョウ、薦原の自然について、全校児童や地域の方に発信する。
1月	地域の自然を守る	4	調べたこと、観察したことをもとに、自分たちにできることを考え、

	ためにできることを考えよう。	本時 (1/4・2/4)	住んでいる環境を守っていくために何ができるのか考える。
--	----------------	------------------------	-----------------------------

5. 本時について

①目標

- 今まで学習してきたことを振り返りかえることで、自然と人とのつながりを知り、自分たちにできることを考えることができる。
- 調べたこと、考えたことをもとに、友達の考えと比べながら、自分の意見を伝えることができる。

②本時の流れ（90分）

学習内容	指導の手立て
1. 本時の学習について知る。	
ギフチョウの観察や、薦原地域の探検から、わかったことをまとめよう。	
2. 映像1〈春の女神〉 映像2〈幻の女神〉 ギフチョウについて学んだことを出し合う。 ギフチョウが生きていくために必要なものは何であつたのか振り返る。	・ギフチョウの生態や、生息する場所などを振り返らせる。 ・ギフチョウが生きていくために必要なものを、映像や資料から確認させる。
4. 映像3〈ギフチョウの食べ物〉 ギフチョウの食べ物、幼虫の食べ物について振り返る。	・今まで観察してきた花の写真を提示して、視覚でもわかるようにさせる。
5. なぜ、これらの植物が減ってしまったのか考える。	・個人の意見が出ないときは、グループで考えさせる。 ・子どもたちの意見を、分類して板書をする。（自然な変化、人の手による変化、帰化植物の影響など）
6. なぜ、ギフチョウが八幡地域に存在するのか考える。	・他の地域との比較をさせることで、より自分たちの地域の素晴らしさに気づかせる。
7. 映像4〈ギフチョウがいる僕らの町〉 実際に映像を見て、自分たちの考えを確かめる。	・映像4を見ることで、自分たちの地域の素晴らしさを再確認させる。

8. 自分たちの住んでいる地域は、なぜ自然が豊かに残っているのか、秘密をさぐろう。	・次の学習につなげる投げかけをする。
わたしたちの地域を守っていくために、自分たちにできることを考えよう。 9. 映像5 〈ギフチョウネットワークの活動〉 ギフチョウの保護だけではなく、自然を守るために自然調査や手入れをしてくださっている様子を見る。 10. 活動の様子を知って思ったことを出し合おう。 11. 自分たちにできることを考える グループで話し合いをする。 話し合ったことを発表する。 12. ギフチョウネットワークの方から、みんなにメッセージをいただく。 13. 今日の学習を振り返る。	
・自然を守るために、たくさんの活動をしてくださっていることに気づかせる。 ・加納さんに活動の補足をしていただく。 ・映像を見て思ったことを出させる。 ・自分の考えをもたせてから話し合い活動に入らせる。 ・グループのなかで自分の考えを出し、出た意見をまとめさせる。 ・発表には、意見をまとめるための用紙を用意し、書画カメラ用と板書用を用意させる。 ・振り返りシートに感想を書く。	

三重大大学
環境 ISO 学生委員会の活動紹介
～世界一の環境先進大学を目指して～

三重大学環境ISO学生委員会の活動紹介 ～世界一の環境先進大学を目指して～



環境ISOキャラクター「まるとる」

三重大学環境ISO学生委員会
委員長 丹羽 麻友



環境ISO学生委員会って
どんな組織？

- 三重大学がISO14001取得キックオフ宣言時に設立
(2006年2月)
- 学生の「**環境マインド**」の向上を活動理念とし、大学の教職員の方々と協力しながら活動を行っている
- 現在ではメンバー数128名(中心メンバー43名)



生物多様性



海浜植物の観察会



三重県の準絶滅危惧種
ハマニガナ

町屋海岸の自然を再生し、
生物多様性の高い砂浜を未来に残す

国連生物多様性条約第10回締約国会議 パートナシップ事業 『COP10in三重』



生物多様性環境宣言文

国際理解
学習



伊勢湾洋上環境学習



亀山里山公園

生物多様性や
国際環境活動への考えを深める

COP10会場白鳥公園でのブース設置



三重大学ブースの様子



生物多様性世界マップ(上)とツリー(下)



生物多様性のために
自分ができる行動への意識を高める

環境学習



3Rについての学習



ペットボトルタワー作り

エネルギー学習



大学構内の太陽光パネルの見学



ペットボトルを利用した風車作り

**学生と児童が共に学び、
互いの環境意識を高める**

世界遺産や地域の文化財等に関する学習



海の博物館見学



島羽の海女文化を学ぶ



熊野みかんボランティアへの参加



地元農家との意見交換会



熊野古道体験

**地域の魅力を体験・学習し、
地域の活性化を目指す**

ご清聴ありがとうございました



三重大学環境ISO学生委員会

三重大学国際交流センター留学生 海との出会い

海との出会い

ケドカル・アルチャナ archu29khedkar@gmail.com
譚 穎 anniesue2007mie@gmail.com
謝 倩氷 371945114@qq.com

海との出会い 海の美しさ

ケドカル アルチャナ

風景

・ 青い空と青い海の美しさ



風景

・ 船に乗っている時見たこと



風景

・ 写真を撮ることより実際の美しさ



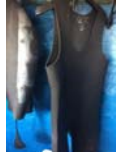
海との出会い

海女さんと海の博物館

謝 倩氷

海女さん

- ・ 海女小屋: 海女さん休憩する場所



- ・ 50秒の勝負: 海女さんは海に潜る時、潜水設備を何にもかけずに、ただ眼鏡をかけて、作業している。「『わずか50秒に命をかける』海女たちと膝を突き合わせ、心を通わせあった記録だ」(読売新聞)
- ・ 今回私たちを連れて、海女小屋を見学するのは海女さんである。彼女によって、一番年上の海女さんはもう80代だそうである。(一番年上の海女さんは潮汐や波の状況に詳しいそうである)
- ・ 星の印: この星印は魔よけのようなものである。これは海女さんが無事に帰るのを守っている。



海の博物館

- ・ 日本唯一の海についての博物館(ここで海についてのことをいっぱい教えられる)
- ・ 特徴:
 - ①この博物館は報告室(コンクリート)を除いて、全部木造である。
 - ②海の博物館だからこそ、できるだけ海の近くに造るが、津波の災害を防ぐために、海拔13メートル(防災の最低海拔)のところに造られた。
 - ③天井の設計もオリジナルで、私たちがまるで巨大な船の中にいるようである。
 - ④館内には順路も壁もない。これは自分の興味のあるものを見つけやすいからである。

感想

- ・ 今回の海女小屋の体験によって、海女さんと海との深いつながりが分かった。今、日本列島のほかに、韓国の済州島にも海女さんがいる。でも、近年、海女さんの人数が激減してきた。今、海女の文化は海の博物館の館長石原先生を中心に、済州島と連携して、日韓とともに世界文化遺産を申請されている。
- ・ 海女が世界文化遺産に入れるように心からお祈りしております。

海との出会い

漁村の環境保全

譚 穎

海と人間

- ・ 旅の後半は『海と人間』の博物館と呼ばれる海と親しく付き合ってきた歴史と現在、さらに未来を伝える海の博物館にやってきました。
- ・ 海の博物館で、漁村の遺跡をたくさん展示しています。これらの遺跡から、漁民たちや彼らの家族たちの生活の側面が見られます。そこで、プラスチックの入っている魚の遺体を見ました。小さい体の中で、それほど大きなプラスチックの破片があるのは大驚きでした。遺体を見て、まるでそのプラスチックで苦しんで体が切り裂くような魚が目の前に現れるそう思わず沈黙となったのです。



自然とともに生きている漁村の人たちはピュアで、海女
の存在も彼らが人間の体を最大限に使って、環境を
守る証拠なのです。
では、そういう残酷なことをした私たち観光客は自分
の一手一投足にもう少し気を配るべきではないでし
ょうか。

鳥羽海の博物館と海女小屋見学会 参加レポート

平成 25 年度 日本/ユネスコパートナーシップ事業

『海の博物館と海女小屋』見学会の参加者募集について

1. 目 的

本学は、私たちとその子孫が、この地球上で生きていくことを困難にするような様々な問題について考え、立ち向かい、解決する、持続可能な開発のための教育 ESD (Education for Sustainable Development) の視点を取り入れた環境教育プログラムを推進しています。

平成 26 年 11 月に開催予定の「ESD in 三重」に向けて、ESD の基本的な考え方“世界遺産や地域文化等に関する教育”について三重県特有の海女文化の魅力を理解し、その文化を次世代まで継続していく担い手を育成することを目的とします。

2. 日 時

平成 26 年 1 月 11 日 (土) 8 時 30 分～17 時 30 分 (予定)

※交通状態等で、予定時間より遅れることがあります。

3. 内 容

(1) 海の博物館の見学と石原館長の講演

海の博物館は「海女文化」をユネスコの無形文化遺産に登録することを推進しています。石原館長から伊勢神宮と深いつながりのある海女文化について話を聞きます。

(2) 海女小屋の見学と海女さんから海女の暮らしや文化を聞く

三重県は全国の海女の数で全国の半数近い男女が今も活躍しています。海女小屋の見学と海女さんの暮らしや海を相手にした仕事の面白さや大変さについて話を聞きます。

(3) 答志島海底ケーブルの視察

離島に電気を送電するために、敷設されている答志島の海底ケーブルを“エネルギー環境教育”として鳥羽市北端から視察します。



ESDの概念図

4. 行 程 (コース) ※集合：正門前 8 時 25 分 (時間厳守)

場所	三重大学 (正門前) : 出発	海の博物館 (鳥羽市浦村町)	昼 食
時間	8 時 30 分	10 時 30 分～12 時 30 分	12 時 40 分～13 時 10 分

— 上記より続き —

海女小屋 (鳥羽市国崎町)	答志島の海底ケーブル	三重大学 (正門前) : 到着
13 時 40 分～14 時 30 分	15 時 30 分～15 時 50 分	17 時 30 分

5. 参加対象 三重大学の学生及び教職員
(ESD in 三重の主旨に賛同していただける方)6. その他 先着順 15 名。全てバスで移動します。
お弁当は各自で用意してください。(※近くにお昼の食事ができる場所があります。)
参加費無料

7. 申込み先・問合せ先

三重大学 環境管理推進センター支援室 (環境・情報科学館 1 階) 電話番号：059-231-9823・9223
次の「参加申込書」に必要事項を記入し、環境管理推進センター支援室へ持参かメール (jimukyoku@mie-u.ac.jp) で提出してください。



平成25年度 日本/ユネスコパートナーシップ事業

海の博物館と海女小屋 見学会



笠島 海産ケーブル



津市



笠島 海産ケーブル

鳥羽市

海女小屋



※写真はイメージです。

参加者募集

参加費無料

応募締切 平成25年12月25日 水

平成26年11月に開催するESD in 三重に向けて“持続発展教育の担い手”として参加しませんか。

日時

平成26年1月11日 土

出発

到着

8時30分～17時30分 (予定)

コース

(予定)

場所	三重大学(正門前)	海の博物館	昼食	海女小屋	笠島海産ケーブル	三重大学(正門前)
時間	8:30	10:30～12:30	12:40～13:10	13:40～14:30	15:30～15:50	17:30

見学内容

- 1 海の博物館の見学と石原館長の講演
- 2 海女小屋の見学と海女さんから海女の暮らしや文化を聞く
- 3 鳥羽市北端から笠島海産ケーブルを視察

参加対象

三重大学の学生及び教職員
(ESD in 三重の主旨に賛同していただける方)

その他

先着順15名。バスで移動、昼食は自費

申し込み方法

三重大学 環境管理推進センターのホームページ→ユネスコスクール→「参加申込書」をダウンロードしてください。
記入後に環境管理推進センターに送付か、メールで送付してください。

詳しくはホームページでご確認ください。

三重大学 環境管理推進センター

検索

環境管理推進センター 支援室 担当者/池村

電話:059-231-9823・9223 Eメール:jimukyoku@ceme.mie-u.ac.jp



鳥羽市答志島と海の博物館見学に随行して

川口祐二

(一)

新春早々の1月11日(土曜日)、私は鳥羽市佐田浜の船着場で、三重大学を朝8時に出発した、当日の見学会に合流した。参加者は、朴恵淑副学長以下全員で43名である。

その日は潮風が吹いた。冬の海風である。船着場はかつての場所から少し前方に移り、決して広いということではないが、すっきりと整備されていて、観光鳥羽の一つの顔となっている。

全国の連絡船の発着場を知悉するわけではないが、今までに訪ねた利尻、礼文の港、福岡の姪浜^{めいのはま}の船着場などに比べれば、利用客も多いし、港としてのまとまりがある。沖縄の西表島^{いりおもてじま}の大原港にどこか似ている。

(二)

船は定刻10時45分にともづなを解いた。風波の立つ鳥羽の海を横切る。最初の港和具浦で下船した。しばらく歩いて小学校校庭へ。中部電力の神島^{かみしま}への、送電線陸揚げ部施設の説明を受けるためである。中部電力の職員から、丁寧な説明を聞く。堤防に立つと、電線でつながれた神島が臨まれた。はるか左上の方に中部渥美火力発電所が見えた。

昼食は答志コミュニティアリーナでとる。島で作られたおにぎりである。これがうまい。サメダレが細かく刻まれて入っている。サメダレとは、サメの身のうす塩の干物、伊勢市鳥羽市など限られた地域での海の珍味である。(しかし、大王崎ををまわって熊野灘に入ると、サメダレを作り、また食べる習慣はほとんどない。)

参加者は誰もそれがサメダレと気づかなかった。大半が学生であったこともある。留学生も多くいた。昼食のあと海女小屋を案内して下さる、地元の「島の旅社」のスタッフの一人、濱口ちづるさんが、サメダレが入っていることを話してくれた。話を聞いて参加者は「ほうっ」と呟き、そしておいしいことを再確認した。

知らずに呑み込んでしまっただけである。知って味わえば、「一入^{ひとしお}」の言葉の通りとなる。濱口さんは現役の海女、答志島では若手の一人だ。

うまいおにぎりを頬張って、あとすぐ次の目的地を目指す。海女小屋まで歩く。そこまではゆるい坂道である。上り坂に行く。坂には「へーふり坂」という名がつけられている。島の漁師たちが明日も風^なぐように、そして大漁をするようにと、幣^{へい}を振って歩いたことから、名づけられた、ということ同行の人たちに話した。

海女小屋を覗いた。ここでは濱口さんが案内者である。冬磯をやらないから海女はいない。また、時期としても春の漁には一足早いから、ワカメ干しの作業もなく、干しダコが中空に揺れる、答志島特有の岸辺の風情も目にすることはできなかった。

(三)

当日の後半は、海の博物館で館長の石原義剛さんの講話を聴くことと、館内の見学である。

私たち一行はバスで一路パールロードを走った。パールロードに入るまでの少しの間であったが、佐田浜やかつてクロノリの好漁場であった大明地区^{おあけ}の埋め立てなど、伊勢湾台風以降の開発行為によって、沿岸漁業が潰れたことを話した。そして、「なかのこう」駅を通り過ぎるとき、ここが江戸川乱歩が青春時代の一時期を過ごした場所だということをつけ加える。「ほう」という学生たちの呟きが耳に届いた。

浦村大橋のこと、この付近の人たちのかつての暮らしは、船が中心であったことなど、二、三、話すうち、海の博物館に着いた。

石原館長は、海を守ることは人間を守ることだ、その大切さを若者に一言ひとこと、言葉を選んで諭すように語った。海を汚さないことの実践が日本人すべてに必要であり、そのことがひいては今脚光を浴びている海女漁を守り、後継者の育成につながるのだと、熱っぽく話した。途中で上映された海女漁の映像が、参加者の理解を深める上で、大いに役立ったことをつけ加えておこう。

(四)

私は、その日になって思いつきで案内者らしい振る舞いをしただけで、これなら前もってどこで何を話すかなどを検討しておけばよかったと今、反省しきりである。

自動車のスピードに合わせて、「目に入るもの」を十分に説明するのはたやすいようで、なかなかむずかしい。観光バスガイドであってはならないからである。

そうなると寺田寅彦の「案内者^{*}」の一文ではないが、「思うにうっかり案内者などになるのは考えもの」なのである。しかし、それを知りつつ、何かを若者たちに伝えた人という思いが、しきりであったのだ。

寅彦は続けて言う。「案内者になる人はよほど気をつけなければならないと思う」と。咄嗟に出た説明が、かえって余分であり、正鵠を得ていなかったのではないか。反省しきりというのは、このことなのである、

反面、学生たちが果たして、あの時、聴き上手な被案内者であったかどうかは、短時間内であったので、私には分からない。

*「案内者」は寺田寅彦の名随筆の一つである。現在は、岩波文庫『寺田寅彦随筆集第1巻』の中に入っている。簡単に入手できるので、参加した学生諸君に是非、一読を勧める。

海とともに生きよう

国際交流センター 譚 穎

2014年1月11日、三重大学の日本語・日本文化研修生として鳥羽市に見学した。一日未満の見学であるが、小学校の隣の電力プロジェクトも、美味しい島むすび、海女さんとの面会も、海の博物館も、たくさん勉強になって、いい思い出を作ることでもできた。

朝大学の専正門で集まり、バスで出発した。移動中、日本語勉強の話が話題になって、わいわいしたし、日本語能力試験に参加する予定の五人は学習チームまで組んだ。話しをしているうちに、海の近くに着いた。内陸に生活歴10年以上の私にとって、海水の匂いを嗅ぐのはありきたりなことではなかった。それで大喜びした。

私たちが乗る船は、本土から答志島へ、そして島を一周するルートで運航している。しばらくの休憩後、船に乗って旅に出た。まずは答志島の小学校で神島への海底ケーブル電力運搬について勉強した。本土から離れている島への電力運搬は日本という島国にとって



は一つの重要な問題である。たくさんの島があつて、その島で生活している住民たちは電力を使うのは必要である。けれども、現地で直接発電するのも陸上から電力送付するのも大量の資金が条件となっている。そこで、海底ケーブルを使って電力を島に提供するのは赤字を減らすことが出来る。ケーブルを保護するため、海底でも工夫しているのである。二つの島の間で、ダイバーや、警戒船が活躍した。平成17年から始まった工事の成果が今この島に不可欠な一部になっている。



そのあとは、食事をし、島のガイドさんが私たちを連れて砂浜の海女小屋に行った。海女の歴史を語りながら坂道を歩き、小さな石が足の底を軽く押すように、気分がどんどん良くなってきた。三重県の海女が住んでいる漁村は全国で少数の残った漁業をする職人たちが住んでいるところの中の一つである。そのため、彼女たち（一部はご主人と一緒に）は自分の職業を誇りに思っている。だが、海女たちは今大きな危機に直面している。若い人は新しい業種に移り、海女さんたちは後継者がいないというのは一般となり、結果として、海女は高齢化している。今年八十歳を超える海女さんが鳥羽にいる海女さんたちのリーダーである。話によると、彼女は熟年だが、体

の調子がとてもよくて、経験も豊富で、他の海女さんに尊敬されているようだ。

2013 年流行った朝ドラマ「あまちゃん」もそれをテーマにしたいい作品であるが、現地の人々にはドラマの影響がそれほど大きくはないようで、海女さんになると志した若い人も未だに現れていなかった。

海の博物館で、朴先生と館長さんの話を聞いて、経済も発達していなく、交通もあまり便利ではないところで、政府からお金を貰わず博物館を運営する難しさがよく分かってきた。確かに、毎年東京や京都など有名で、大都市を訪ねていく人は数千万、数億人いるかも知れないが、鳥羽のような小さい都市ではどうもそれほど大人数を招くことはない。それでも、館長を始め、博物館のスタッフたちは色々困難を乗り越え、博物館は今までも開館できるようになっている。

この博物館の内部構造をデザインしたのは一人の立派な建築家である。建築は全体的に木が素材として広く使われている。そのため、冬は少し保温効果がよくないが、夏は涼しいし、展示している遺跡や資料などの保存にはるかに有利である。そして、環境保全の視点からも、館内の保護からも、できる限り電力気の使用を減らし、人が耐えられる寒さと暑さがこの海の博物館の特徴である。ホール天井もすべて丸くにし、空気が流れやすくしているそうである。

私は心からその建築家の将来性のあるデザインに感心している。独特の天井はあえて博物館の景色となり、一緒に来ていた学生たちは皆その写真を撮っていた。電気を使わないところは自然らしさがあって、都市から田舎に帰ってくるその心が休める雰囲気はすぐに出ていたのである。おまけに経済的に負担も減っていく。なんといい発想だろう。実際、

私もその場にいて、寒がってはいたが、体がふるえるほどではなく、意識が相当明晰になっていた。おかげで、真剣に館内を観ることができた。

館内で、一番気になるのは、環境汚染による魚の被害である。死んでいた魚の死体で、プラスチックなどが発見され、漁業をする漁村の人たちか、その近くに観光した人たちが犯してしまっただろう。ギャラリーで、船がたく



さん保存している部屋もある。そこは土足禁止なので、足と床が触れ合う時は痛くなるくらい寒かった。しかし、色々な形の船を一気に見ることができ、大満足だった。木の匂いあり少しくらい明かりが、古い歴史の濃厚さを表現している。

もちろん、お土産もとても魅力的だった。海からの幸や、それをテーマとした芸術品など、どれもほかのところではなかなか見られないデザインだった。ハガキを記念に買って、友達に海の近くでの体験を話そうと思う。

最後はみんなで記念写真を撮った。強い風の中でも笑顔を絶やさず私たちと共に見学し、大切な知識を教えてくださった三重大大学ユネスコの先生の方々や旅に出会った皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。

海女さんと彼女らの生活

——「海の博物館と海女小屋等の見学会」の研修レポート

国際交流センター 凌奕樹 リョウエキジュ

天気恵まれ、1月11日に、みなさんと一緒に鳥羽市に行きました。本当にいい天気でした。生まれて初めて海を見て、美しかったです。写真のような青空と青い海は一丸となりました。私は青色が大好きです。なぜかという、青色を見た後、すぐ落ち着けるになるからです。ですから、私は海と空が好きになります。どんな悩みや困りがあっても、空を見上げて、すぐ気分転換ができます。残念なことに、寒い天気のせいで、海には入れられません。でも、大丈夫だと思いますが見るだけでも幸せを感じられますよね。

答志島に昼ごはんを食べた後、海の博物館に行きました。その前、地元の方は答志島について紹介していただきました。親切なおばちゃんですが、歩きながら周りの風景を紹介して、面白かったですね。本当にいい勉強になりました。一番深く印象に残ったのはやはりその実際の海女小屋でした。今年の流行語に一番面白いと思うのは「じぇじぇじぇ」です。ドラマ「あまちゃん」のおかげで、海女さんの生活について少しだけ分かるようになりました。ですから、実際の海女小屋を見た時、「本物だ！」という喜びは今まではっきり覚えていました。特に海女さんの服を手で触ってみたら、テレビで見た時の感じとぜんぜん違いました。

それから、海の博物館へ行きました。館長先生の分かりやすい説明のおかげで、あまさんのことについて、興味があってきました。短いビデオを見た後、海女さんの仕事について、分かってきました。その「50秒の勝負」が一番肝心だと思います。「『わずか50秒に命をかける』海女たちと膝を突き合わせ、心を通わせ合った記録だ。」（読売新聞2014）

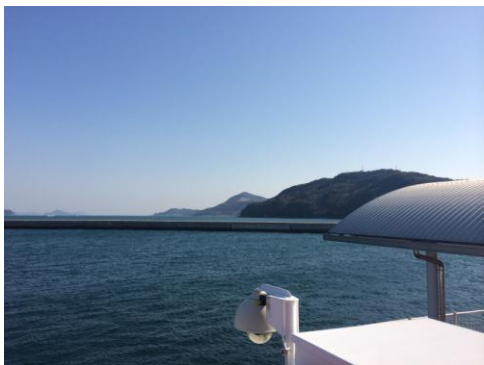
今回の旅行も一緒に参加いらっしゃった川口祐二先生は海女の生活についてたくさんを研究しました。日本全国の海女たちを対象として、聞き取り調査をお行いになりました。先生は今81歳ですが、海女たちに関することをおっしゃった時、目が輝くになりました。日本で海女さんが一番たくさんいる鳥羽・志摩は今、海女文化をユネスコ無形文化遺産登録に向かっていろいろ頑張っています。海の博物館の中でその努力さを十分感じられます。何のため、海女さんは働きますか。普通の仕事とぜんぜん違いますが仕事の環境は本当に厳しいと思います。しかし、そのわけはよくわかりませんが、海女さんは海の中に微笑んでいる時、彼女らの勇気と堅持には敬服しました。

海女さんたち一生懸命に頑張っている姿を見た後、何か勇気をもらう気がしました。最後、最高の祈りを差し上げて、無事に一生を過ごしますように。

1.11 海女小屋の体験

国際交流センター 謝 倩冰

今日、鳥羽市の答志島へ海女小屋を見学に行きました。見学の後、海の博物館という珍しくて素晴らしい博物館へ行きました。



船に乗って、答志島へ出発！



見たこともない海の青さはすごくきれいです。



到着！



答志島は神島への海底ケーブルによる電力供給の一環として大きな役割を果たしています。
海がとてもきれいです！



幣振り坂(へーふりざか)



こちらは太平洋です！



神事(じんじ)の舞台：この島の大きな年中行事はすべてここで行われます。



丸八、人々を守る矢印

ここはこの島の子どもを集めて
一緒に寝させるところです。
これは答志島ならではの風俗です。



海女小屋：海女さんはここで休憩します。



日本唯一の海についての博物館

ここで海についてのことをいっぱい教えてもらえますよ！

この博物館は講義室(コンクリート)を除いて、全部木造です。海の博物館だから、海の近くに建っていますが、津波の災害を防ぐために、海拔 13 メートル(防災の最低海拔)のところに造られました。天井の設計もオリジナルで、私たちがまるで巨大な船の中にいるようです。館内には順路も壁もありません。これは自分の興味のあるものを見つけやすいからです。



この星印は魔よけのようなものです。これは海女さんが無事に帰るのを守っています。



面白い看板



今回の海女小屋の体験によって、海女さんと海との深いつながりが分かりました。今、日本列島のほかに、韓国の済州島にも海女さんがいます。でも、近年、海女さんの人数が激減してきます。今、海女の文化は海の博物館の館長石原先生を中心に、済州島と連携して、日韓とともに世界文化遺産を申請されています。海女が世界文化遺産に入れるように心からお祈りしております。

見学レポート

国際交流センター エルドンオチル

2014年1月11日に鳥羽市の答志町の小学校と浦村町の海の博物館などのところへ行ってただ遊びではなく見学もできました。まずバスに乗って鳥羽市着いてそこから船に乗って島のところ答志町に行きました。海がないところに生まれて船に二回だけ乗った僕に本当にいい体験でした。その後小学に行って答志町の送電について説明してもらいました。次は海女小屋を見学しました。私にとって海女が初めて聞いた言葉です。その後、海の博物館に行って川口さんと館長さんに海女について説明してもらってもっと詳しく了解しました。それ以外もたくさん海について知識をもらって、とても楽しかったんです、ありがとうございました。



海の博物館と海女小室等の見学会

国際交流センター ハー・マイ・アン

海女は海に潜って、貝類を取るという女性である。海に潜る時、ウェットスーツ着用と水中のメガネで作業をする。ビデオを見ると、これは簡単なことではなくて、危険なことが分かった。それで、疑問が二つあった

一つめはそんなに危ないことは女性だけがやっているのか？ 男性はやらない？やらないなら、どうして？ ベトナムでは海に行って、魚を取るのは男性だからである。女性は池とか川にいる魚や貝を取るし、取った海産物を販売する。

二つめは発展国の日本ではどうして、彼らは潜水服とかスキューバの道具などを利用しない？ 現在、海女らは息を止めて、海に潜って、貝類などを取って、また海面に顔を出して、呼吸するそうである。しかし、自分の息をしばらく止められないはずである。その短い時間うちに、貝類を探して、取るのは難しくないだろうか？そして、何もまだ取っていないけれども、もう息を止められないので、海面に顔を出さなければならないこともある。そのことを何回も繰り返して、つかれるのはもちろん、時間もかかるし、効率がよくないと思う。

そのような疑問を持って、インターネットで調べた。色々ないい情報が出てきた。男性の海人もいる。ただ、男性と女性も「アマ」と言われるが、文字で書けば、漢字だけ違うと分かった。女性の場合は「海女」で書き、男性の場合は「海士」で書く。それと、潜水服を利用することがあるけれど、作業しづらいので、普及しないそうである。しかし、スキューバの道具を利用しない理由がまだ見つけられない。時間と自分の力がもったいないので、その道具を使うほうがいいと思う。

ベトナムには海女という人はいない。この見学会を通じて、初めて海女という人と海女たちの仕事を知って、非常にびっくりした。海女さんはすごくて、偉いことをやっていると思った。そして、博物館にすごくいい印象に残っている写真がある。その写真がおそらく仕事の後に、ハンドの鏡を見て、目がキラキラで、ニコニコしている海女さんの姿である。その海女さんの笑顔がもちろん素敵ですが、私は鏡を見るという行動のほうが好きである。その写真を見ると、「さすが女性」と思った。どんな仕事をやっても、女性は自分が綺麗になりたいのではないだろうか？その海女さんもそうだと思う。海女の仕事がどんなに難しくても、自分が綺麗になりたい気持ちをもってほしい。

鳥羽への見学感想

国際交流センター 南香淑



1月11日、松岡先生に誘っていただいたおかげで、鳥羽の見学に行くことにしました。1年の留学ですから、時間があったら、京都とか、東京とか、大阪などの有名なところを旅行するつもりでした。でもこの頃鳥羽に旅行した後、私の考え方がちょっと違うことになっております。有名なところはもちろん行くつもりなんですけど、できるだけ意味があるところにも行きたいと思っております。

日本には2000名くらいの海女が働いている中に50%以上が三重県で働いていると聞きました。私は朝鮮族で、中国の他の民族より海女に関してよく知っているんですが、日本にそんなに多くの海女が住んでいることは知りませんでした。だから、びっくりしたこともあるんです。また日本の海女が世界文化遺産を目指していることも、本当に素晴らしいです。

できるだけ、このようないい勉強になる日本のいろんなところに行きたいです。



「海の博物館と海女小屋等の見学会」へ旅行のレポート

工学部 イッツエル・ヤレド

鳥羽の旅行が面白いでした。そちらで色々なことができました、例えば船に登ったり、海女に会ったり、博物館へも行きました。

海女の文化が本当に興味深いです。その女たちは貝を探すのに昔から同じ手段を守り続けています。それでその文化が世界の文化遺産です。それもそちらで海女小屋が見えました、私はその所を見たら海女の生活が面白い、でも大変だと思いました。ちなみに世界に強い性はいつも男性ですが海女のためには女性は強い性です。ほかにも外国人の見方からすると真珠が本当に安いです。

二つ目はどうやってその島まで電気が送られるということを習いました。その手段の原理は簡単でも、作り方はより難しいと思います。なぜなら、海の底で大陸から大きいケーブルをつないでいるからです。それにそのケーブルの寿命は三十年ぐらいです、それで手入れは大切にややこしいらしいです。

後、博物館でもう少し海女のことを習いました。一枚貝の芸が見えたり、潜水艦に入れたり、環境保護主義のことを習いました。と言うのは博物館の建築は面白いから普通の建築に対して、いつも日本では建物は外はコンクリートで中で木です。でもその建物は意外です。

以上のように、この旅行でよく習いました、よく見えました、よく楽しめました。そしてそのすてきな旅行を本当にありがとうございました。

鳥羽への遠足の最も印象に残ったものについて

国際交流センター バウシュケ ソーレン

2014年1月11日に、鳥羽への遠足に出かけた。本当を言えば、朝7時50分くらい早く39人の参加者が揃ってから、バスに乗った時には、まだ具体的にどんな遠足や、どんな経験になるか、あまり想像できなかった。その前、どこか鳥羽から少しだけ離れている島へフェリーで行くし、博物館でいわゆる「海女」を中心とする人間と海を含める生態系についての展示を観ることになっていることしか知らなかった。それで、特別な期待なく、その遠足に参加させていただき、下記どんな経験や刺激が最も印象に残ったかについて書く。

鳥羽についてから、1つ目の目的地として、答志島にフェリーで到着した。そこで、答志島から神島への海底ケーブルや、それでどうやって電力が神島まで供給されているかなどについて詳しい説明を聞いた。絶え間なく強い風に吹かれ、ある程度聞きにくくても、海底ケーブルがなぜ電力供給のために使われるようになったかという歴史的な繋がりについての話に関心を持って耳を澄ました。それによると、昔神島に立っている内燃力発電所を利用して電力を生産していたが、海底ケーブルでも安定した電力供給を保障することができるようになってから、8キロメートル以上の長さのケーブルを据える予定に変更したそうである。海底ケーブルが人間に作られた異物のようなものとして、環境や生態系に何か影響を与えているかどうかや、水面下でケーブルを環境影響から守るために外装としての鉄線やプラスチックをつける時、何か問題が表面に出たかどうか、などの不明な質問が残念ながら残っている。しかし、詳しいイラストの印刷された用紙を配っていただいたおかげで、そのプロジェクトの範囲が想像しやすくなった。

答志島の後で、海の博物館というところまで行った。そこでの展示が海と人間の関係や、そのお互いへの影響についてだから、映画でも展示されたものでも「海女」について学ぶ機会があった。既に、館長の講演とその後の映画で、海女が話題の中心になり、新知識がたくさん身につけられた。現在の海女のほとんどがもう高齢者になっており、その数が減りつつあるだけではなく、後継者も不足しているために、現在の海女たちがその最後の世代になっている可能性が高いという情報に驚いた。講演後拝見した映画に写ったように、海女が男性の相棒と沖に出、機械を利用せず貝を採るという既に古代から伝わってきた技術を会得した人の遺産がなくなったら、人間への大変な打撃のようになると思う。

海の博物館での展示が説明していたように、人間と自然との関係がよく偏ったものになり、つまり海が人間の食べ物になることがよくある訳である。それで、海女が人間と自然の理想的な関係がどんなものかや、そのような関係で生活もできるかどうかを見せたと思う。例えば、採った貝が一定のサイズより小さかったら海に戻されるという映画に写ったシーンも、人間の敬意のこもった自然に対する姿勢の一般の人々も習うべき手本である。

それでも、いろいろな海女に関する不明なところが残っていると思う。例えば、なぜ女の人がその映画でも苦しいと言われた貝を採る仕事を引き受けているかや、なぜ国家に海女の後継者になることも振興されていないか、という質問を聞いて答えていただければ良かったと思う。

確かに、その人間と自然の関係や、お互いへの影響が遠足と提示の中心のテーマであった気がする。特に、博物館の特殊な構造やエネルギーを節約する方法と、2階で展示されている水質汚染についての看板が印象に残っている。例えば、原子力発電所から海や河川に流される温廃水によって海が暖まり、漁業が損なわれるという影響も、魚と水生植物が減るほど有害だという影響もあるそうである。よくニュースで激しい批判の対象になるように原子力発電がいくつかの危険を伴うことは知っていたが、その周りの環境への影響も及ぼすことは、新知識となった。

他に、詳しくなければあまり大したことではないと考えさせる「海が赤くなる」という環境問題もあり、展示で説明を受けた。それによると、有機物が海に流されると、それを食うプランクトンなどの微生物が大変増加していくそう。それで、海の生態系が強い影響を受け、血を流したように赤くなり、さまざまな動物が生き延びられない環境に変わるそうである。

当日の海と人間を中心とする活動と経験を通じて、私は前より環境保護の大切さが理解できるようになり、参加させていただけたことに、感謝している。

鳥羽への旅の一日

国際交流センター ケドカル・アルチャナ

2014 年 1 月 11 日に三重大大学の日本人学生と留学生とともに鳥羽市に行った。朝 7 時 50 分に皆が集まって、バスに乗った。8 時にバスが出発した。バスの中は、友達といろいろ話したりしてとても楽しかった。日本のバスはとてもいいなと思った。バスが走っている時、通っている場所についてご説明していただくことが私にとって珍しくてよいと思う。

鳥羽について、バスを駐車場に止めてもらって港まで少し歩いた。答志島へ行く船に乗った。船での旅も素晴らしかった。風が強かった。けれども、海と空の間の水平線を眺めて行って素敵だなと感じた。かもめが空を飛んでいた。とても寒かった。鳥羽にある答志島に到着した。答志島というところにある電力送付について詳しくご説明していただいた後、少し回りを見学した。その海がとてもきれいだった。近くのところでお昼をいただいて、また少し歩いて、海女小屋を見学した。海女さんがどこでどうやって生活しているかについてもご説明していただいた。海女さんが偉いと感じた。

それから、また船に乗って海の博物館の方へ進んでいった。私が疲れてバスの中で少し居眠りしてしまった。少しあと海の博物館に着いた。大きなホールの椅子に座らせていただいてから、海女さんについてのビデオを見せていただいた。そのビデオを見て感動した。海女さんについてそんなに詳しくは知らなかった。ビデオを拝見した後、館長先生から海女さんについて詳しくご説明していただいた。先生がとても親切だなと感じた。自然の保護を中心にして、博物館が建てられたことがわかった。海女さんの人生についてもっと知りたくなった。こういう海女さんが日本と韓国にしかないのだ。博物館を見学して、普段は見られないいろいろなものを見ることができた。

帰り道はみんな疲れて、バスの中で寝てしまった。旅行好きの私にこんな珍しい経験ができてとてもよかったと思う。先生に誘っていただき、とてもありがたい気がする。

「海の博物館と海女小屋などの見学会」について

国際交流センター 朴英花



鳥羽に到着、答志島に行く船を乗る前、記念写真を撮りあったりして、面白かった。



船に乗り、答志島に到着。答志島では海女小屋の見学したり、島でとれたもので作った島むすびを食べたりした。また、中部電力の方による海底より電気を答志島からさらに他の島に送る工事しているとの説明を聞いた。この工事にかかる金額は膨大なもので、中部電力さんにとっては、赤字になるとの話しだったが、それでも、島にいる方々が不便がない生活が送れるよう頑張っているとの事には感動した。



答志島にある海水浴場の写真である。写真を見て分かるように、海水がとても綺麗で、当日は非常に寒かったが、飛び入りたい気分だった。今度の夏休みに絶対もう一度行きたいと思っている。



海の博物館は他の博物館の展示物と違いガラス箱に入れられたりすることはなかった。近くで見て、手で触ったりできることには驚いた。また、展示されている船の量と保存状

態にも驚いた。そして、館長さんの博物館は冷暖房具が必要ない構造に建築されたとの話しも聞いた。私は、建築学とは遠い専門なので詳しくは知らないが、このような構造が博物館に置かれている展示物にいい環境であることと、冷暖房具使わないことで、環境にも優しい事だということを今回の機会に知ることができた。

当日は週末で、出発が朝早くて眠いし、寒かったのでしぶしぶ家を出たが、綺麗な海と、中部電力さんの暖かい気持ちと博物館に関する知識など、充実した一日を過ごすことができ、今後、またこのような機会があれば、ぜひ参加させていただきたい。

ユネスコ見学会感想文 1月11日(土)

三重大学環境 ISO 学生委員会 1年 木ノ元 隆之

今回ユネスコスクール見学会を通して、鳥羽市の答志島と海の博物館へ行きました。鳥羽市へ行く間のバスのなかで、委員会にいる先輩のお父様がいて驚愕しました。神島発電所から答志島へ海底ケーブルをつないでいたものでした。ですが、それでは安定して電力を供給することが出来ず、答志島では、電気が使えない状況があったみたいです。そこで、神島から答志島への電力海底ケーブルをとりやめ、本島からの接続を行いました。そこで、本島から答志島への供給が、黒字か赤字か担当者に質問している方がいました。担当者は、「赤字ですが、黒字のところがあるので、それで補っています。」という風な答えが返ってきたときは、とても感心しました。これは、赤字なら電力をしなければいい。そのような考えではなく、赤字でも人のためなら惜しまない。そのような奉仕に見えた。(集合の様子)



(足湯をする二人)



(フェリーに乗る様子)

次に、答志島からフェリーで鳥羽市に戻り、バスで海の博物館へ行きました。海の博物館の天井には、船底を利用して、空気が溜まらないようにしているようでした。石原先生のお話を聞いて印象に残ったことは、「伝統を後世に伝えていく」的な発言でした。博物館が赤字にも関わらず続けていく、つまりお金には代えられない、そのようなものがあるのだと思いました。

今回のツアーで思ったことは、人からもの、海女の心をつなげていく。つまり持続することが大事だと感じました。

ユネスコスクール見学会感想

環境 I S O 学生委員会 2 年 澤井宏佑

今回私たちはユネスコスクール研修会として答志島と神島を結ぶ海底ケーブルや海女小屋、海の博物館へ見学することになりましたが、なぜ海女の文化がユネスコに関係するのか正直分かりませんでした。少なくとも研修会当日までは。海女文化は「海の博物館」に行くことで、学ぶ理由について十分に知ることができました。

海の博物館では石原館長に海女文化を残す意義について熱弁していただきました。海女はサザエやウニ、アサリといった海の幸である生き物をとってきてくれます。このような生き物が存在するには海藻の森が広がっていることが条件になります。つまり海の環境が整っていない限り海女さんは存在し合えないということになります。現在海女は日本と韓国にしか残っていないそうです。石原館長はこうした事実をふまえた上で「海女文化をユネスコの無形文化遺産として残すことで海の環境を守っていこう。」といった目標を掲げていました。ここでようやく私は海女文化とユネスコをつなげることができました。私たちが住んでいる地球を次世代に生きる人たちへ残すにはいったい何をしなければならないか考える非常に良い機会となりました。

私にとって海の博物館というところは非常に興味深いところでした。建物の設計だけで8年の歳月を費やしたそうです。あえて順路を設けず、入館者に自分が見たいものを見つけてもらう工夫や新しい資料の展示をするうえでの効果を最大限に発揮するために壁があまりない構造にした工夫などがされていました。中でも一番印象に残ったものは、建物の素材は木材を多く使用し、鉄の使用を極力避けたということです。展示資料の保管を長期にわたってするうえで錆びから回避することを目的とした考えだそうです。これは正倉院の造りをまねたものとなっています。過去のをを現在に取り入れ未来にも残すという上で、この建物もユネスコの考えに沿っていると感じました。2時間という限られた時間ではこの広大な博物館を知り尽くすのには物足りないと思う面もありました。しかし、もう一度ここを訪れたいという感情を私に芽生えさせました。

答志島では株式会社中部電力が敷設している海底ケーブルについて聞くことができました。実はこのケーブルを用いた送電は赤字だそうです。なぜ赤字にもかかわらずこのような送電方法をしているのか最初私は疑問に思いました。電力会社は人が住んでいるところに送る義務が定められているからです。企業側に課せられた国からの義務があることを私は今回の研修ではじめて知りました。

非常に多くのことを考えさせ、発見させてもらえたこの研修に大変感謝しています。是非とも似たような研修の機会を増やしてほしいです。この研修で得た気づきを私の中だけにしまっておくのではなく、少しでも多くの人に伝えていきたいです。より多くの人に身近な環境を見つめなおしてほしい。より多くの人に自然の良さを知ってほしい。より多くの人にもっと地球のことを好きになってほしい。以上のことが私の学んだことであり、願いでもあります。

ユネスコスクール見学会感想

石森仁博

海の博物館に今回行かせていただきました。海の博物館は「漁業、海の博物館、漁村の民族」をテーマにした8つの館からなり、約六万点の資料を保管してある博物館で、年間約5万人が訪れるそうです。

海の博物館では無駄なエネルギーを使わない工夫や、博物館を訪れる人が心地よく学ぶことができるような工夫、博物館周辺の気候や立地などをすべて考慮してあり、本当に博物館のどこの部分をとっても無駄なところがない設計にとっても驚きました。

博物館には海女についての展示や魚について、海の環境についての様々な展示があって、特に自分は海洋汚染のために魚の体が変形してしまったりしたのを見て、人間が無責任に排出した有害物質のせいで海の生物にいろいろな影響を与えてしまっているのがとても人間って無責任だと感じましたが、自分も人間であり今日までその有害物質とかの恩恵を受けて今日の生活をさせてもらってるので、何とも言えないなと感じました。よくこういうのを見て、これから海の環境を悪くしないように日々の生活を変えていきたいですっていうけれども、自分は根本である社会のシステムを大きく変えていったりして教育を今までのものとは全く変えていかないといかないのかなと思いました。それまでは少しでも自分の日々の生活を環境にいいようなスタイルに変えていかないといけないとも思います。(もちろんこれからも環境に少しでもいいような生活を続けていきたいです。)

答



事場を見学させてもらったのがとても印象に残りました。

自然とともに生活を営むライフがとても本来の人間の身の丈にあったライフスタイルなんだと感じ



ました。あと伊勢エビや普段見慣れないものなどとても見るものすべてが新鮮で面白かったです。

『海の博物館と海女小屋』見学会に参加して

人文学部法律経済学科 2 年 丹羽 麻友

1. はじめに

2014 年 1 月 11 日、私は三重県特有の海女文化の魅力を理解し、その文化を次世代まで継続していく担い手を育成することを目的とする、海の博物館と海女小屋の見学会に参加した。そこで聞いた話やこの機会に学んだことについて述べていく。

2. 見学を通して

はじめに、佐田浜からフェリーに乗船して答志島に渡り、答志島の海底ケーブルを視察した。以前は神島発電所が唯一の内燃力発電所として神島へ電力を供給していたが、海底ケーブルの設置により、神島に電気を供給する方式となった、と中部電力の担当者から説明を受けた。特に私が印象的だったのは、水深が浅いところで漁師が海底に錨を下ろしたときに、海底ケーブルにひっかけてしまうことを防ぐために、ダイバーの手で防護管を取り付けたということだ。これにより、安全性がきちんと確保されているのだと思った。

また、答志島では海女小屋を見学し、現役の海女から海女の暮らしについて説明を受けた。素潜り漁を終えた後に、仲間の海女と暖をとりながら、世間話をするのが楽しいという話があり、海とともにたくましく生きる中に女性らしさを感じた。

次に、海の博物館を訪れた。そこで館長から博物館と海女についての講演を拝聴した。その中で私が関心を持ったのは、「海の博物館の構造」と「海女と環境」の話であった。

海の博物館は建築計画に 8 年を費やし、①暖房を入れすぎないなど、人が我慢できる範囲内のエネルギーで博物館を運営する②自分で好きなものをいつでも見に行くことができるように順路を作らない③‘劣化を防ぐ’という博物館の役割を果たす、という 3 点を重視して、建設されたという。

また、現在、海女文化は日本と韓国のみが存在するが、両国とも海女は激減し、高齢化が進み、後継者不足という問題がある。しかし、それ以上に深刻な問題となっているのは、人間の手による開発行為や環境汚染により、海の生態系が壊れつつあることだ。インフラの整備により、私たちの暮らしは便利となったが、その一方で環境に悪影響を与えていることを忘れてはいけない。このまま海の生態系が維持できなければ、海女が存在できなくなり、海女文化の衰退につながってしまうのだ。

3. おわりに

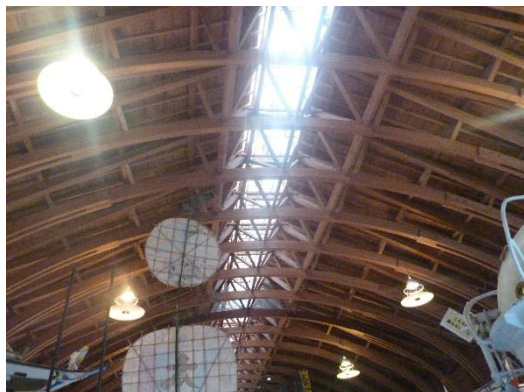
今回の見学会に参加し、海女の生き方に触れることで、私たちは自然の恵みに感謝するとともに、生き物にとって大切な環境を荒らしてはいけないということを改めて認識することができた。環境を保全し、海女文化存続のためにも、多くの人々に海女の生き方について知ってほしいと思った。

海の博物館見学を通して

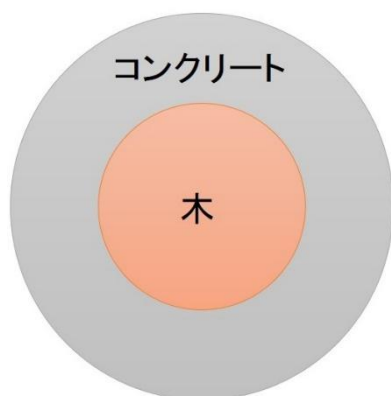
三重大学環境 ISO 学生委員会 工学部機械工学科 1 年 萩原伸育

今回の見学会を通して、海の博物館の存在を初めて知りましたが、博物館の内容はもちろん、建物の構造自体も非常に興味深いものでした。

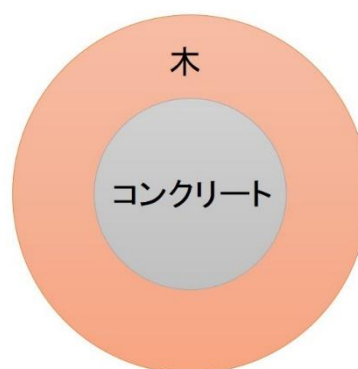
まず、石原先生のお話の中で、なるほどと思ったことは、「無駄なエネルギーを使わず、人間が我慢できるだけのエネルギーを使って博物館を回している」ということでした。



左の写真のように、天井が高く、とても特徴的だったので、博物館に入館してすぐに不思議に思っていたのですが、この天井も自然のエネルギーをうまく活用するための工夫の一つと聞いて、すごいなと思いました。



普通の建物の構造



海の博物館の構造

また、上の図のように、普通の建物はコンクリートの中に木といった構造ですが、海の博物館は珍しく木の中にコンクリートといった構造になっていました。展示物が見やすいように支柱や壁も少ないと聞いて、面白いと思うと同時に、耐震面では大丈夫なのだろうかと疑問にも思いました。

全体が見やすいように支柱や壁が少なく、興味あるところが何度でも見ることができるように順路を作らないといった工夫も面白く、実際に、自分も興味ある分野の展示を何度も見に行きました。

今回の見学で、非常に興味深い海の博物館を見学することができて良かったです。

ユネスコスクール見学会に参加して

三重大学環境 ISO 学生委員会 1 年 別所杏那

今回、ユネスコスクール見学会ということで、海女文化や環境について学ぶ機会をいただきました。また、志摩半島の漁村のようすや、島民の暮らしを支える海底ケーブルについても学ぶことができました。

テレビドラマ「あまちゃん」で、海女に興味をもちました。海女の実在は知っていたけれど、2千年以上の伝統があるということは知らなかったもので、聞いたときはとても驚きました。私の中での海女のイメージは「たくましい女性」でした。今回、海女小屋の見学もさせていただきましたが、洗濯物や毛布などが置いてあり、生活感のある空間だと思いました。ここで海女さんたちが休憩するのだなあと思うと、ワクワクしました。今は海女の季節ではありませんが、夏に実際に海女の仕事をしているところを見てみたいと思いました。

海の博物館では、講演や見学を通じて、「海女と環境」という視点で考えることができました。海の博物館に入ってまず驚いたのが、建物の構造でした。空気を循環させるために天井を高くしてあることや、冷暖房の設備が一部だけであることなど、無駄なエネルギーを使わないようにするための工夫があり、とても環境に配慮した建物だと思いました。また、入館者が自由に見学できるように順路をつくっていないこと、さらに、「主役である展示品を建築が邪魔してはいけない」ことから壁がないことも、海の博物館のこだわりであることがわかりました。

講演の中で印象に残ったことは、「自分の感性・身体を使うことが少なくなっている。しかしその原形は海女さんにある」という話です。海女の歴史のビデオを見たうえでの話であったので、スッと頭に入ってきました。しかし、海女の高齢化が進み、後継者が不足しているというのが現状であり、誰でも簡単に後継者になれるわけでもありません。

だからこそ、世界の中で海女文化のある日本と韓国が協力し、伝統的な海女文化を無くさないように保護していくべきだと改めて感じました。海女文化の根底にあるものは「海の環境」です。海の環境がきちんとあるからサザエやアワビが採れるわけで、海の環境が悪ければ漁ができません。

このため海女文化に限らず、海の環境というのは世界中の人々が協力して守っていかなければならないものだとして再認識することができました。海の環境を守っていくために自分たちにできることは何かを考えていこうと思いました。

鳥羽の海女文化に触れて

工学部 機械工学科 2年 中井 有沙

今回の見学では、海女文化と中部電力の海底ケーブルのことに關してだった。

中部電力が行っている海底ケーブル敷設は億単位の多大な費用がかかるが、電気の供給をする時に以前の島の近くのディーゼル発電機よりも安価で周囲に排気などを出さないからであると聞いた。「そもそも離島に電気を送ることは赤字であるが、きちんと離島でも電気を送ることが大切だ」と言われていたので、企業の務めを果たすことは大変なことであると感じた。

また、フェリーで答志島を訪れ、この海の底に陸と島を結ぶように太いケーブルが横たわっているのだと考えると、遠いところから電気が渡ってくるのだなぁとしみじみ思った。その感動で行った当初は気づかなかったが、どうして自然エネルギーも使うことを考えなかったのだろうとも思った。ドイツかスウェーデンには島で使う電力を全て自然エネルギーで賄っているという島があると本で見たことがある。まだその本を読んでいないから、どういった方法でそれを実現したのかもわからないが、何億もの費用を掛けるならそちらでもいいのではないだろうか。どうしてケーブルを敷く方を選んだのか、今度お会いできたら聞いてみたいと思った。

私が今回の海女文化の見学で最も心に残ったのは、海の博物館の館長さんが言っていた「自分の体や感性を使って何かをするということが、現代では少なくなっているのではないか。それで本当によいのかどうか。」ということだった。現代では、様々なものづくりの工程が機械化されているし、交通に関しても歩くことよりも車に乗ったりしている。海女は己の肉体と感性で漁を行っているが、その海女も近年は減っていついていくということである。

そこで「海女じゃなくてダイビングでダイバーが海産物を取っていたらどうなのか」という言葉を思い出した。海女だったら水中で短い時間しかいることができないので海産物を取りすぎないが、ダイバーだったら長い時間水中にとどまれるので、その間取り放題だと館長が言っていたが、単に取りすぎないように気をつければいいのではないかと思った。しかし、私自身は潮干狩りで貝を取った時に、「貝を取りすぎると来年は貝が減ってしまうのではないか」ということは知っているはずなのに考えなかった。他の人のバケツを見ても貝がどっさり入っていた。自分たちは潮干狩りの時に砂を掘って貝を拾い上げるだけでそんなに苦労しないで取っているが、海女はいつも海の冷たさや流れを感じながら取っているから常にそういうことを考えているのかもしれない。

海女のことを考えると、漁に出る前に神様に祈り、海の恵みに感謝している。利益ばかりではなく、自分たちが得たものは自然がもたらしてくれた宝であるということも知っている。自分の肉体を使い、危険だけど豊かで美しい海に潜り、海の生物を取ってくる海女は、私たちが普段忘れがちな自然の恵みに感謝することや何かを得るためには苦労することなど様々なことをずっと身近で感じているのだと思う。海女文化はそういう大切なことを私たちに思い出させてくれる存在なのではないかと思った。

ユネスコスクール見学会の感想

三重大学環境 I S O 学生委員会 山中悠里

今回のユネスコスクール見学会で、鳥羽市の答志島と海の博物館に見学に行きました。答志島では中部電力の神島への海底ケーブルについてお話を聞き、実際に答志島の小学校に設置してある海底ケーブルを見学しました。まず、この海底ケーブルは、安定した電力供給が可能な海底ケーブルルートが確定したことから、神島発電所からの電力供給を停止し、設置されたものだということを知りました。そして、配布資料を見ながら、海底ケーブルの布設工事について平面図や断面図、さらに、ダイバーによる埋設等について説明を聞きました。私はその中でも海底ケーブルを布設していく際に布設船を使用した押し上げ式という方法により、海底内に布設したり、いかり等によってケーブルに傷がつかないように防護管を設置しているという点が効率や安全・安心ということを配慮したものであるのだろうなと思いました。また、このような様々な配慮によって島に安定した電力供給や島の人々の生活が守られているのだろうなとも思いました。さらに、今まで海底ケーブルや配電盤を近くで見たことが無かったので新鮮でした。

次に、海の博物館に行きました。海の博物館ではまず、館長さんから博物館の概要や海女について、博物館の環境に関する取り組みや工夫などについて聞きました。

海女については、最近、ドラマ等でもとても有名になっていますが、現在、海女は日本に 2000 人しかおらず、以前と比べると 3 分の 1 ほどに減少してしまっているということやそのうちの 1000 人は鳥羽や志摩ににいるということに驚きました。また、博物館の環境に対する取り組みや工夫については自然の暮らしができるようにエネルギーを使い過ぎないというテーマを博物館が持っていて、その活動の一つに SOS 運動という海をきれいにしてくれいな海を取り戻そうという運動が創設時から行われているということや、他に博物館の中には壁や柱がないという工夫も知りました。このことから自然環境を大切にしていることがとても伝わってきました。そして、私が館長のお話の中で最も印象に残っているのは伝統を守っていくという点です。海女は自分の体、感性を使う仕事の原始的な例であり、5000 年以上前からというとても長い歴史を持っていることを知りました。しかし、現在は海女が減少し、さらに高齢化して後継者もいなくなっているという現実があり、改めて海女という文化を後世に存続していかなければいけないなと感じました。そして、海女を存続していくためには海的环境をきちんと保っていかないということも知り、文化や伝統を存続していくためには文化や伝統を継承していくことだけでなく、その環境も守っていく重要性も分かりました。さらに、文化や伝統を継承していくことにはやはり資料を保存していくことも重要であり、そのために博物館では天井を丸くすることで空気を循環させ、資料が腐らないようにするなどの工夫を行っていることも知りました。

今回、電力供給の海底ケーブルや海の博物館を見学して文化や伝統を持続させていくためには環境にも配慮して今あるエネルギーを使い過ぎないことの重要性がよく分かり、「持続性」というテーマについて改めて考えることができた見学会だったと思います。

ユネスコスクール見学会

丸本彩加

まず、答志島の海底ケーブルを見学しました。

「海底ケーブル」を今回初めて実際に見ることができました。

安定した電力供給が可能だと分かりました。

答志島のような小さい島には適した方法なのだろうと思いました。

また、答志島は狭い路地や木が多い島だと思いました。

島全体でご近所づきあいをしているイメージが浮かびました。

昭和時代あたりをテーマにしたドラマから背景をそのまま切り取ったようでした。

公園で夏祭りをするそうですが、島全体から人が集まって、和気藹々とするのではないかと思います。

そして、海女小屋を見学しました。

海女さんの生活に少しふれることができたような気がしました。

海女小屋にはスウェットや靴下が干してあり、生活感を感じました。

囲炉裏もあり、海から戻ってきて寒い時にそこで温まる姿を想像ができました。

私にとって海女さんは、存在は知っているけれど、自分とは遠い関係です。

でも、今回海女小屋を見たことで、その糸がつながったような気がしました。

海女さんの育った環境に触れたことで、海女さんをもっと身近に感じることができました。

「答志島」という島は、今回初めて知りました。

どんな島にも、それぞれの文化が息づいていますが、外部には伝わりにくいです。

海底ケーブル、海女文化などが答志島のアピールポイントでしょう。

なんとなく聞いたことのあるワードでしたが、そこに行って初めて実態をつかめました。

文化というのは、実際に触れるのが一番だと気づきました。

今回見たこと、感じたことをできるだけ多くの人に伝えたいです。

そして、ぜひ自分の目で見てもらいたいです。

それが文化の継承につながっていくのではないのでしょうか。

鳥羽の海女文化を見学して

生物資源学部共生環境学科 1 年 栗田篤志

1 月 11 日(土)自分は初めて鳥羽に行った。この見学会を通じて鳥羽の多くの魅力を発見でき、また多くのことを学ぶことができた。そこで見学会を通じて学んだことを自分なりに振り返っていきたいと思う。

自分たちが最初に訪れたのは答志島であった。そこではまず中部電力の海底ケーブルについての説明を受けた。海底ケーブルは答志島から神島発電所までの全長 8.2 キロメートルでつながっていて、島の人々の生活を支える重要な装置だということが分かった。また答志島では昼ご飯をごちそうになった。この昼ご飯もただのご飯ではなく、島の文化を象徴した食材が使用されており、こうした食事を通じて島の文化が世代を超えて伝わっていくのだと感じた。昼ご飯のあとは海女小屋を見学させていただいた。自分の想像と違い、中は少し薄暗くなっており、絨毯の敷き詰められた空間になっていた。海女文化を代表する海女小屋の存在をもっと多くの人に認知してもらうために、こういう機会が重要なのであると感じた。

次に訪れたのは海の博物館であった。まず最初に目が行ったのは、建物の天井が変わった形をしていることだった。その疑問は館長さんのお話をお聞きして、すぐに解決した。熱がこもらないように設計されてかつての船をモチーフにした屋根で、ここでも昔の文化が継承されているのだということが分かった。またお話を聞く中で、自分の中での海女さんの認識が変わったように思う。今まで海女さんの文化というのは、日本の大事な文化だということは分かっていたつもりでいたが、この文化を守っていくことが ESD ということにつながるということが分かった。海女さんの生活は海の生態系が守られているからこそ成り立つのであり、海女さんの生活を守ることは文化を守ること、持続的な発展をそのまま表しているのものであるということが理解できた。館長さんのお話を聞いたあとは博物館の見学をした。博物館の中には海に関する環境問題の紹介であったり、かつての海女さんの写真が展示されており、ここにも文化を伝えるということが重視されていることが分かった。ただじっくりと見学する時間がなく、すべてを見ることができなかったので時間のある時にまた訪れたいと思う。

今回の見学会を通じて最も強く感じたのは、もっとこの三重の地の文化について多くを知っていきたいということであった。大学に入学して約 1 年が経ったが、今まで自分からこの三重の地のことを知ろうとすることをしてこなかった。この機会を通じて三重の魅力の一部について知ることができたように思う。しかしまだまだ自分の知らない三重の魅力はたくさんあると思う。これからの大学生活を過ごしていく中でもっと三重の魅力を知っていき、今度は自分が次の世代に文化を伝えていけるような存在になっていきたいと思う。

ユネスコスクール見学会 感想

河村海斗

・中部電力の海底ケーブルについて

今回の見学で、海底ケーブルというものが存在することを初めて知り、布設工事の方法について関心を持ちました。お話の中で驚いたのが、ケーブルにジョイントが存在しないということです。8.2キロメートルにも及ぶ1本の海底ケーブルが答志島から神島へ布設船によって設置している様子は簡単には想像できないからです。答志島に住む人の多くが漁業で生計を立てているというお話を、島を案内してくださった海女さんから伺いました。

陸に近い部分のケーブルには、漁船のいかりが引っかからないように防護管を取り付けているということで、答志島に住む人々への配慮がなされていることがわかりました。

私は岐阜県出身で、島というものになじみがなく、離島への電力供給について考えたことがありませんでした。陸から遠く離れた島に住む人々にも、内陸の人々と同様に電力が供給されていることを知り、安心しました。



図 地上に表れている海底ケーブル

・海の博物館について

海の博物館では、海女文化だけではなく、漁業の歴史や、漁業に使われていた道具などが見られて、興味深かったです。今回はすべての展示を見ることができなかったため、機会があればまた見学に来たいと思いました。

博物館の中で興味深いと思ったのが、屋根の形が曲線状になっていたことです。見るからに複雑なつくりで、入館したときには、なぜわざわざこのようなつくりにしたのだろうと疑問に思いました。石原館長のお話で、屋根を曲線状にすることで空気の流れができ、結露を防ぐことで、建物の老朽化を防ぐためだとわかりました。

石原館長は、海の手環境を守るためにもエネルギーを使いすぎないことが大切だと話されていましたが、建築においてもこのような考えが取り入れられていることに驚きました。物を長く使うことが環境にいいという認識はありましたが、建築物という何十年も残るものについて長持ちさせる工夫が凝らされるということは考えたことがありませんでした。また、博物館にさびやすい金属である鉄が使われていないことや、海沿いであ



図 曲線になっている博物館の屋

るが、津波の影響を受けない海拔 10 メートルのところに建てられていることなど、博物館及び、展示品を守るための工夫がいたるところにありました。

・海女文化について

私は、海女というのは、伝統的な文化を持つ職業だと考えていましたが、漁業の 1 つの形態であるという視点から考えたことはありませんでした。漁業といえば、船に乗って、竿や、網を使うものだというイメージしかなかったので、人間の手だけで収穫を行って生計を立てられることに改めて驚きました。かつて、海女は自給に換算した場合、日本で一番儲かる職業であったというお話にも驚きました。石原さんのお話を聞いて、海女と、海中の環境の関係について理解し、海中の生物、その餌となる海藻があってこそ、海女という職業が成り立つということがわかりました。また、天然のアワビや、サザエは、海女さんが収穫する以外に手段がないということから、海女の文化をなくしてしまうことはもったいないと思います。海中の環境が良くなり、昔のようにアワビがたくさん収穫できるようになれば、後継者不足を解決する要因になるのではないかと考えます。私たち一人ひとりが海女について知り、海の環境を考えることが、海女文化を守っていく第一歩になるのではないかと考えます。

ユネスコスクール見学会 感想

久保俊

中部電力の海底ケーブル

答志島での中部電力が管理している海底ケーブル(図1)を見学してみて、本島から答志島までの距離を長い一本のケーブルでつないでいることを知り、スケールの大きさに驚いた。そのケーブルは海底を通っているのだが、固定はされてなく、漂わせることで破損を防いでおり、また陸に近く浅い箇所には、ケーブルを強化することで、船の錨が当たっても傷つきにくいようにするなど、様々な工夫をして考えられて設置されていることを知り、島に安定的に電気を供給するために企業が尽くしているのだと思い感動した。また、そういった企業の影の支えによって島が支えられているということで、他にもどのような企業がどんな取り組みを島に対して行っているのかとても興味を持ち、知りたくなった。さらには自分が住んでいる場所ではどのような取り組みがあるのかも知りたいと思った。

また、この大規模な海底ケーブルの設備の一部が小学校の校庭の端にあったことはたいへん驚いたが、身近にあることで、小学生にも海底ケーブルについて知ってもらい、どのように電気が供給されているのかを知って学んでもらえる機会が多くなっていいのではないかと思った。しかし、この海底ケーブルを作り維持することはたいへんお金のかかることであるが、なくてはならないものなので、こういった活動の支援や補助を国が行っていくことが大切になると思った。

今回ユネスコスクール見学会の中でこのようなことを学習できたことは、自分にとってとてもいい経験になった。普段自分が生活している時は、電気が使えることは当たり前になっており、どこから電気が来ていて、どのように供給されているのか全く興味を持つことはなかった。しかし、電気を供給するためにここまでのことをしないと供給できない場所もあるのだということを知り、今まで以上に、電気が通っていることに感謝して、節約できるところはして大切に使わなければいけないと思ったし、実行していこうと思った。



(図1)

海底ケーブル

海女文化について

答志島の散策で、実際に海女小屋を見に行った。見た目はとても質素な感じだったが(図2)、中に入ってみると、寒さを防ぐための工夫やウェットスーツを干す場所もあり生活感がある印象を受けた(図3)。しかし、その小屋を冬も海女さんが使っているのだと知り、とても寒そうだった。だが、海女さんの話を聞いていると、海女小屋で、その日に獲ったものを食べたり、仲間と話したりすることが、海女さんのやりがいの一つなのだと知ることができ、海女小屋と呼ばれる理由が分かった気がした。

今回海女文化を学んでいるうちに、このような昔からの文化は今後も伝統として若い人たちが継承していかなければならないと思った。しかし、今海女さんの数が年々減ってきており、かつ高齢化も進んでいる。一般の漁業に比べ、量は劣るかもしれないが、自然の恵みに感謝し、直に触れながら獲る漁法は、価値があるものだと思うし、無くなってほしくないと思った。また、海が汚れることによって、海女さんが獲るアワビや牡蠣などが生息する藻場が減少することによって、獲れる量が減ってしまったことも、海女文化の衰退を促していると感じた(図4)。なので、自分にできることは小さいことかもしれないが、洗剤をできるだけ使わず、水をよごさないようにアクリルたわしを使用するといった、身近にできることから行っていき、海女文化が今後も受け継がれていくように自分なりに努力していこうと思った。



(図 2)



(図 3)



(図 4)

文化の継承とその意義について

三重大学環境 I S O 学生委員会 中村浩俊

平成 26 年 1 月 11 日（土）に、「平成 25 年度日本／ユネスコパートナーシップ事業」の一環で行われた「海の博物館と海女小屋見学会」に参加をしました。この見学会の主な目的は、三重県特有の海女文化を理解し、その文化を次世代まで継続していく担い手を育むこと、とされており、見学箇所も海女文化に関連した場所が多かったのですが、中部電力の取り組みで海底ケーブルに関する説明もありました。

実は自分は、生まれてこの方三重県で生活をしているにも関わらず、これまで「海女文化」なるものに触れる機会が全くなく、最近連続テレビ小説で話題となったテーマではあるものの（番組は一度も見たことはありませんが）、三重県にそういった文化があることは知ってはいましたが、今回の見学会に参加するまで一度も関心を寄せたことがなかった、というのが正直なところでした。

そのため見学会に参加するに当たり、自分は「海女」について、メディアなどの情報によって描かれたイメージ以外の予備知識がほとんどない状態での参加となったのですが、これが却って海女文化を「新鮮」に感じることができ、海女文化の衰退に危機感を持っている方々の訴えを、素直に、そして冷静に受け止めることができたのではないかと、今では思っています。そこでここからは、そのとき感じた率直な自分の感想を書いていこうと思います。



【左：この海岸から前方の神島に向かって海底ケーブルが布設されています。右：海女小屋の概観】

見学会の最初は、神島への電力供給のために、従来の神島発電所からの電力供給を停止し、答志島から神島に向かって海底ケーブルを布設したことの説明を受けました。この事業は、従来の人件費（神島発電所の維持）は浮くことになるのですが、神島の人口を考えると電力料金による収益は赤字になるようです。しかし島で生活する人々がいる以上、電力事業者として安定的な電力供給を行う努めがあるため、海底ケーブルを布設したとのことでした。

次はいよいよ海女文化についてです。まずその歴史の長さに驚かされました。縄文時代

の遺跡の発掘調査から、すでにその頃には海女のいた痕跡が発見されていたとのことで、つまり日本の米食文化よりも長い文化であることを意味すると考えられます。このことは、海の博物館の石原館長もおっしゃっていた、「自分の手足を使った生活の原型が『海女』であることもうなずけます。それだけでなく館長は同時に、「今の生活は手足を使わずに済むことばかりで、自分の『感性』を使わない生活をしている」ともおっしゃっており、そのことの危機感からも海女文化の継承の必要性を説いていました。

この話を聞いて、では海女文化が消失すると「私たちの生活」にはどのような影響が出るのか、という疑問が沸き起こりました。海女がいなくなってしまうと、アワビなどの海産資源の漁獲量が減ってしまい、それらが食卓に並ぶ機会が無くなってしまうのではないかと考えたからです。そこで早速その疑問を館長にぶつけたところ、自分にとっては意外な答えが返ってきました。

最初に返ってきた答えが、現代はスキューバなどの潜水技術が発達しているため、海女さんよりも長時間海の中にもぐることができ、そういった技術を使えばもっと効率良く海産資源を得ることができる、という話です。これはつまり、例え海女文化が消失しても、それに取って代わる技術があるため、私たちの日常生活レベルではその「消失」をほとんど感知することができない、ということを意味すると考え、どことなく文明社会の恐ろしさを感じざるを得ませんでした。

しかし館長のお話には続きがありました。そういった技術を使うと、知らずの内に「乱獲」になってしまいかねない、と言うのです。海女による漁法は、海の神に自然の恵みへの感謝をするところから始まり、「ひっくり返した石は必ず元に戻す」ほど磯場の生態系を大切にするもので、その積み重ねが結果的に生態系の再生を促し、海女漁による「持続可能な漁場」を築いているのです。しかしそのことを考えず、ただ効率と目先に利益だけを求めてしまえば、その漁場はいつか生態系が損なわれてしまうため、長期的な視点で見ると海産資源を失うことにも繋がるというわけです。



【イースター島の様子

現在の姿からは、かつて樹木が生い茂っていたことはとても想像できない。海の中でも既に同じことが起こっているのかもしれない。】

Original Update by [jdelard](#)

(flickr)

この話を聞いて、「文明崩壊」(Jared Diamond 著) という本で、実際に文明が崩壊した事

例として取り上げられていた、イースター島の話を出しました。イースター島はかつて、世界最大のヤシの木が生息していたほど森林資源に恵まれ、それらの木材を使ってカヌーを作ったりして海産資源を得たり、日用品に加工したりして、人々は生活していました。しかし木材の用途はそれだけでなく、あの有名な「モアイ像」を製造・運搬する際にも使用していたようです。モアイ像は、島内でいくつかに別れた氏族ごとで作成しており、その大きさや数は、氏族の権力の強さを示していました。そのためいつしか島民は、なるべく大きなモアイ像を作ることに躍起になり、気がつけば島の森林資源が壊滅したことで、生活手段の多くを失い、太平洋の孤島で数百年間誰にも気づかれることなく、静かにその文明は幕を下ろしたようです。

このイースター島の事例を踏まえ、もう一度海女文化を見つめなおしてみると、私たちは多くの自然由来の資源の恩恵を受けて生活しているにも関わらず、「お金」という価値観に翻弄されて、自然の大切さ・必要性の多くを忘れてしまっているのではないのでしょうか。そしてここで思い出したいのが、冒頭で述べた海底ケーブルの話です。文明社会に身を置く私たちにとって、科学技術は欠かせないものとなっていますが、本来それは生活を豊かにするために作られたものであるはずで、金銭的な利益を得るためのものではないはずで、海底ケーブル事業はまさにその象徴だと感じました。

しかし持続可能な社会を目指すには、そういった「技術」が行き過ぎないように、うまく付き合っていくためにも、忘れてはいけない継承すべき「文化」があるということと、その文化が私たちに何を訴えているのかを理解する必要があるのだと、今回の見学会を通じて痛感しました。

鳥羽での神島への海底ケーブルと海女文化見学

三重大学環境 ISO 学生委員会 安井沙織

1. はじめに

2014 年、持続発展教育 ESD の世界会議があり、最近 ESD やユネスコの取り組みが注目されています。ユネスコスクールにも指定されている三重大学を構成する学生の一員として、三重県の無形民族文化財である「海女」の文化について、平成 26 年 1 月 11 日に、実際に海女が働いている鳥羽へ見学に行きました。また、中部電力による鳥羽の答志島と神島をつなぐ海底ケーブルの見学もさせていただきました。

2. 海底ケーブルの見学

平成 17 年に、鳥羽の答志島と神島をつなぐ海底ケーブルが中部電力によって設置されました。設置以前は、神島に内燃力発電所があり、そこから神島全体に電力が供給されていましたが、答志島から安定した電力供給ができる海底ケーブルのルートが確定し、発電所の効率化のため、海底ケーブルによる電力供給が始まりました。

電力は人々の生活に今や必須であるため、8.2km もある海底ケーブルの安全性は重要です。人の手が滅多に及ばない海底という場所は、自然の驚異にさらされる危険な場所です。そのため、海底ケーブル本体の導線は周りに太い鉄線が 2 重に巻かれて頑丈に保護されていました。また、答志島付近は漁業が盛んであるため、漁船を止めるための碇が海底に下ろされます。その碇が海底ケーブルに引っかかり、ケーブルを傷つけてしまう恐れがあります。そのため、水深が浅く、碇に引っかかる恐れがある範囲には鉄の筒でできた防護管が潜水土によって手作業で取り付けられました。

このように、神島の人々のために、安全に、効率よく、地元産業の漁業についても考慮した電力供給が行われていました。電力供給のために地元産業が規制されてしまうような、その土地の文化が廃ることなく、便利な生活ができるといいです。

3. 海女文化の見学

素潜りで海底にいるカキやアワビなどの貝を獲ることを生業とする女性を「海女」と呼びます。答志島で、その海女たちが実際に使っている海女小屋を見学させていただきました。寒い時期の冷たい海に入った後に体を温めるため、海女小屋の中にはいろりがありました。また、1 月に見学させていただいたため、小屋は暖かいようにしっかりと覆われていましたが、夏は風通しがよくなるように調節できるそうです。小屋は昔から使われている手作りの小屋で、漁に必要なものがたくさんあり、海女たちが使いやすいように工夫されていました。この小屋は、ただ作業の道具を置いたり体を温めたりするだけでなく、海女たちにとっては憩いの場であり、文化を伝える場であるそうです。この小屋は海女たちが共に過ごし、先輩から後輩へ海女の経験が受け継がれていく大切な場所なのです。

海女小屋の見学の後には、漁業、海の世界、漁村の民族をテーマに海に関するものを展

示した「海の博物館」も見学に行き、博物館の館長さんから話を聞いたり、海女のビデオを観賞したりしました。この博物館は、来館者がそれぞれ発見をしてほしいとの館長さんの考えで、展示物の配列も工夫されており、順路を作らず来館者が各々興味のあるものを自由に見ることができるようになっていました。また、博物館を開館した時から、save our sea(私たちの海を守ろう)という「SOS 運動」を行っており、博物館で無駄なエネルギーを使わないように、暖房・冷房を極力使わないようにしていました。そして、博物館の屋根が船の形になっており、博物館全体で漁業を感じることができる造りになっていました。このように海の博物館には建物自体に様々な工夫がされており、館長さんの、博物館にかける思いが伝わってきて、このような貴重な場が、いつまでも大切にされるといいと思いました。

また、館長さんの話やビデオで海女文化の現状について知ることができました。特に印象に残ったのは、海女同士や夫婦で協力して海女たちが作業している映像でした。海にもぐって貝を採った妻を、夫が船の上から引き上げる協力作業は、お互いの信頼関係があってこそその作業方法だと思います。海女同士が共に作業し、共に休憩することで、仲間と一緒にいる安らぎが生まれます。このような海女たちの人とのつながりを持って作業する仕事は、現代の社会にとっても大切なものだと思います。

海女たちが仕事を続けていくには、貝が生息する海の環境を守ることが重要です。現在、海の環境悪化に伴い、海女の仕事場が限られており、海女の人数自体が減少しています。日本古来の海女文化を絶やすことないように、海の環境を守る取り組みを日本に生きる私たち全員が続けていくことが大切ですので、これからも海を大切にしていきたいと思います。

ユネスコスクールで鳥羽に行きました

生物資源学部共生環境学科 1 年 内田大智

1 月 11 日(土)、朝から鳥羽までバスで行った。私としては、鳥羽や今回の目的地であった海の博物館にも行ったことがあったが、今回はユネスコスクールの研修であったので、今まで旅行とは違った新しい気持ちで臨むことができた。

まず、バスに揺られてフェリーに乗り、答志島へ向かった。そこには、中部電力が設置した全長 8km 以上の海底ケーブルがあった。その海底ケーブルによって神島発電所から電気を供給して 2500 人を超える島民の生活を支えているようだ。資料や話を見たり聞いたりしていても、どのような工事であったのか中々想像できなかったが、実際に海底ケーブルが通っているところを見た島の小学校のすぐ側を通っているのには驚いたが、島の中では学校は私たちの地域よりも身近な存在なのだと感じた。そして、思いのほか目立つことなく草木に隠れるように設置されてある姿を見たとき、私は本当に大変な作業で莫大な費用をかけて赤字覚悟で設置した海底ケーブルがまるで縁の下の力持ちのように、ひっそりとしかししっかりと島民を支えているような感じがして感動した。そして、はるか遠方に臨む神島に伸びる海底ケーブルに思いをはせながら、昼食の時間になった。

昼食はカキの佃煮、サメの干物、じゃことわかめのおにぎりといじきのコロッケであった。自分は幕の内弁当でも出てくるのだろう、とおもっていたので驚いたが、どれも大変美味しく、体に良さそうであった。昼食の後、いよいよ海女文化が息づく答志島を散策した。

答志島は自分が今まで棲んできた津市とは全く環境が異なっており、たくさんの家が坂に沿って所せましに建っていた。まるで、違う国にでも来たようで中々おもしろかった。家の壁や扉に「八」の字が書いてあったが、何なのかその時は分からなかった。後で知ったが、答志島には八幡神社という神社があり、その文字の「八」を書くことでおまじないの事をしているらしい、地元の祭りの話も聞いて今でも神社を祀り、島の文化を大切に守っているのだな、と感じた。そして、いよいよ現代使われている海女小屋に到着した。

ここまで感想を書いてきて何だが、私は、三重県民としては恥ずかしながら、海女は観光目的以外は残っておらず、漁業技術が発達した今、素潜りで漁をする文化が残っているわけないと思っていた。しかし、本物の今使われている海女小屋を見たとき、小屋の中にかけてあるダイバーが着るようなスーツと昔ながらの囲炉裏が共存してある光景を見たとき、私は自分の考えを改めると共に、今でも海女の文化はこの島に根付いているのだと感じた。長いようで、短かった答志島での研修は、冬の寒風に吹かれながら乗ったフェリーと共に去って行った。その後、最後の目的地である海の博物館へ行った。

海の博物館は、小学生の時に一回行ったことがあったが、その時の記憶はほとんどなく、ただ、古い船がたくさんあったなあぐらいのものであった。だから、今回の研修が無ければ、恐らく私はあの博物館には二度と行かなかっただろう。ところが館長の話聞いて、博物館には空調設備をつけず環境負荷を抑えていること、高校の美術の教科書にも載って

いた船底のような独特な形の屋根が実は空気を巡回しやすくして空調なしでも少しでも快適に過ごせるための工夫であると知り、大変興味深いと共に驚かされた。私がさらに目から鱗だったのは、海女文化を守るということは海女が生きる地域の環境、生態系を守ることという館長の話であった。私は今まで文化と環境と言うのは切り離して考えていた。だから、環境が破壊されてしまうのは問題だが、文化が衰退してしまうのは時の流れとして仕方がないことなのではないかと思っていた。しかし、実際は海女が潜る海はきれいで獲物であるアワビやウニが豊富に無ければならず、文化が続いているということは地域の人たちが文化だけでなくその環境もまもっているのだと感じた。もし、海女文化がなくなってしまうえば、誰も海を守らなくなりその環境は破壊されてしまうかもしれない。環境問題と言うのはあらゆる視点で考え、対策していかなければならない問題なのだと再認識させられた。館長の話聞いた後、博物館内をまわったが前来た時には何も感じなかった古びた船や展示物にも歴史がありそれを使ってきた人たちの間には文化があったこと、そしてその文化によって守られてきた自然があることが感じられ、面白かった。

最後に、日帰り研修と言うことであわただしかったが、今までの自分の考え方を見直し、自分の今後の活動にも反映できるような貴重な体験をする事ができた。またこのような機会があれば是非参加したい。今回は、自分の所属している環境 ISO 学生委員会の人達以外とは交流することができなかったが、次回はもっと積極的にコミュニケーションを取りたいと思う。

若さに満ち、明るく爽やかな三重大生、
とてもユニークな教職員の方々と、楽しいバスツアーに参加させて頂き
有難うございました。

海の博物館、海女小屋、海底ケーブルの視察等どれも初めての体験でした。
特に現役の海女さんから、海女漁の話を聞いたり
気さくに海女さんとの会話を楽しんだり格別でした。
海女小屋の火場で、魚介を焼いて暖をとり、冷たくなった体をあたため
会話を楽しむ、先輩の話を聞き知識を得てお互いを知る
こう言った風景こそ継承して行って欲しいですね。

海女文化！ユネスコ世界文化遺産登録にむけて

50年前 日本の漁船はすべて木造船で、
約2万人以上の船大工の手によって造られてた。
現在は、エンジンなどが加えられ、船が変わり船大工はいなくなった。
この様に便利な時代になりつつ、職人の技、技術が無くなる。
そして、海は汚染される。とても寂しくなりますね。

私達も、もっと文化や歴史を学び、一人でも多くの人に
良さを伝えたいと思います。

松阪ユネスコ協会 佐田 行康
あや子
千奈美

海の博物館と 海女小屋見学会に 参加させていただきました

2014. 1. 11 Sat



木公阪ユネスコ協会 池村友紀子

厳しい寒さの中、総勢約40人で和やかな雰囲気の中、楽しく有意義な一日を過ごさせていただきました。

知らなかった世界を知ること（は）とてもワクワクするものであ。そして、私たちが今、知らなくてはいけない、知るべきことがここにあるのだと、実感させられるのです。

海女文化とは、ただ単にその行為が存在するのではなく、その生き様をもって、自然の恵みに感謝して生きることの大切さ、命と生涯をかけて働くことの誇りと喜びを私たちに伝えてくれているのだと..... このすばらしき海女文化が、一日でも早く、ユネスコ無形文化遺産に登録されますことをバより祈願いたしております。 参加させていただき、本当にありがとうございました!!



海女さんのすばらしき
うまみ

愛情たっぷり本当に
おいしいがたに
ごちそうさまでございませ〜

楽しく学べた海の博物館と海女小屋見学会

松阪ユネスコ協会 池村智津子



朴恵淑先生の
ごあいさつ(バス車内)

今回、三重大のバスツアーに参加させて頂き、
いろいろな新しい発見をすることができまし
た。

同行させて頂き本当にありがとうございました。

答志島も、海女小屋も、海の博物館も初めて
の体験でした。

答志島の街角の坂道は、どこか海外
を思わせるようなおしゃれな雰囲気
があり、心惹かれました。



答志島の街角にて
Chikuzaki. el

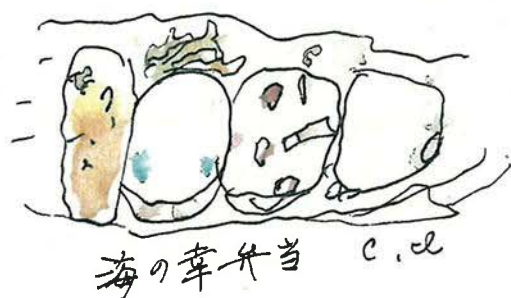


海女小屋へは、海女さん自らが案内して下さり、大感激でした。命をかけて海女として海で生きる・・・誇りと自信が体中に溢れてとても魅力的なバイタリティを感じました。

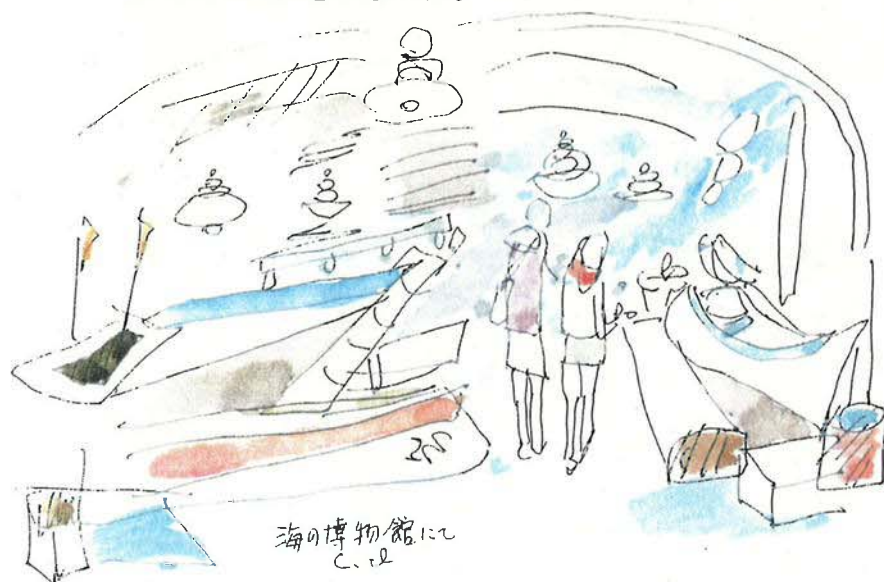
海女文化について、勉強不足なので、これから学んでいきたいと思います。お忙しい中同行して下さいだった川口様の著書も読みたいと思います。



海女さんが作って下さった、海の香りがする、おにぎり弁当の味も格別でした。サメのおにぎりは初めてでした。どの種類のおにぎりもほっぺが落ちそうな位おいしかったです。



海の博物館館長様のお話はとても印象に残りました。特に館内見学“順路を決めてない”との考え方が素晴らしいと思いました。順路を自ら決めることは自分の人生を自ら歩むことにつながります。今日をどう過ごすのか、今をどう生きるのか、この瞬間何を大切にするのか・・・自ら学び、考え、行動に移すというESDの考え方にもつながることだと思いました。



海の博物館にて
C. el



海の博物館元館長様
C. el

寒い日ではありましたが、若さみなぎる学生さんたちと、同行させて頂いたことで、学生さんたちのエネルギーも頂けたように思います。

バスでは、私の隣に座ってくださった女子学生さんが私の話し相手になって下さって、いっぱいお話しでき、とても楽しい時間を過ごせました。

そのほか、留学生の方々や、教職員の方々などとの新しい出会いもあり、心に残る旅になりました。

松阪ユネスコ協会は昨年3月に発足したばかりです。今回交流させて頂けて大変嬉しく思いました。今後ともご指導のほどよろしくお願い致します。



C. el

本松阪ユネスコ協会の参加者

発行／平成 26(2014) 年 2 月

国立大学法人 三重大学

問合わせ先／環境管理推進センター支援室

(ユネスコスクール委員会事務局)

〒514-8507 津市栗真町屋町 1577

TEL 059-231-9823・9223

FAX 059-231-9859

E-mail jimukyoku@ceme.mie-u.ac.jp

ホームページ <http://www.ceme.mie-u.ac.jp/>

印刷／有限会社アートピア

